師範學校

國文教科書

巻四

375.9
Y619
資料室

42574
教科書文庫
4
810
51-1919
20003
02266

資料室

37517
Y019

文部省檢定濟
大正八年一月十日　師範學校國語科教科書

吉田彌平編

本科用

師範學校國文教科書

卷四

東京　光風館藏版

廣島大學圖書之印

広島大学 教 14269 図書

師範學校 **國文教科書** 本科用卷四

目次

			頁
一	偉人その一	嘉納治五郎	一
二	偉人その二	嘉納治五郎	一〇
三	吉田松陰	杉浦重剛	一六
四	天職（候文）	國木田獨歩	二四
五	擣衣	清水濱臣	二九
六	里祭	伴蒿蹊	三〇
七	名物（狂句）		三三

八 千里が竹その一……近松門左衞門 三三
九 千里が竹その二……近松門左衞門 三九
一〇 相模灘の落日……德富健次郎 四四
一一 常磐木(新體詩)……島崎藤村 四八
一二 光頼卿の參内……〔平治物語〕 五三
一三 佐那田餘一その一……〔源平盛衰記〕 六二
一四 佐那田餘一その二……〔源平盛衰記〕 六八
一五 武士道……山路愛山 七五
一六 狐塚……〔狂言記〕 八五
一七 能をつかんとする人……兼好法師 九五
一八 四時のあはれ……兼好法師 九六

一九 自然と色彩その一……松本亦太郎 一〇〇
二〇 自然と色彩その二……松本亦太郎 一〇六
二一 賀茂眞淵……伴蒿蹊 一一三
二二 春の心(短歌)……一二〇
二三 師の說になづまず……本居宣長 一二四
二四 白石と宣長……上田萬年 一二七
二五 扇の的……〔平家物語〕 一三三
二六 落花の雪……〔太平記〕 一三九
二七 福澤先生を悼むその一……島田三郎 一四七
二八 福澤先生を悼むその二……島田三郎 一五三

附錄

第四編 記號法
一 送假名法……一
二 句讀法……七
三 分別書方……一〇

生民ニ人民
崛起ニ にぱるニ起リ立ツ
炳ニ著明ナルコト

嘉納治五郎
教育家。東京高等師範學校長。萬延元年(一八六〇)生。

廣島大學圖書之印

師範學校 **國文教科書** 本科用 卷四

一 偉人 その一

嘉納治五郎

古來の生民蓋し幾萬億、其の中より卓然として崛起し、功業德澤炳として萬世の下に輝いて居る者は、實に彼等偉人である。若し偉人を人類の歷史から除き去つたとすれば、吾人の過去は如何に暗憺として如何に寂寞なものであらうか。幸にして幾多の偉人・傑士が星の如く歷史の空に列んで居て、今猶吾人の心中に其の不老の輝を投じ、其の破闇の

大上人乃最上ノ行ヲイフ。大上は大上有レ立レ德、其次有レ立レ功、其次有レ立レ言。雖レ久不レ廢。此之謂二不朽一。左傳。

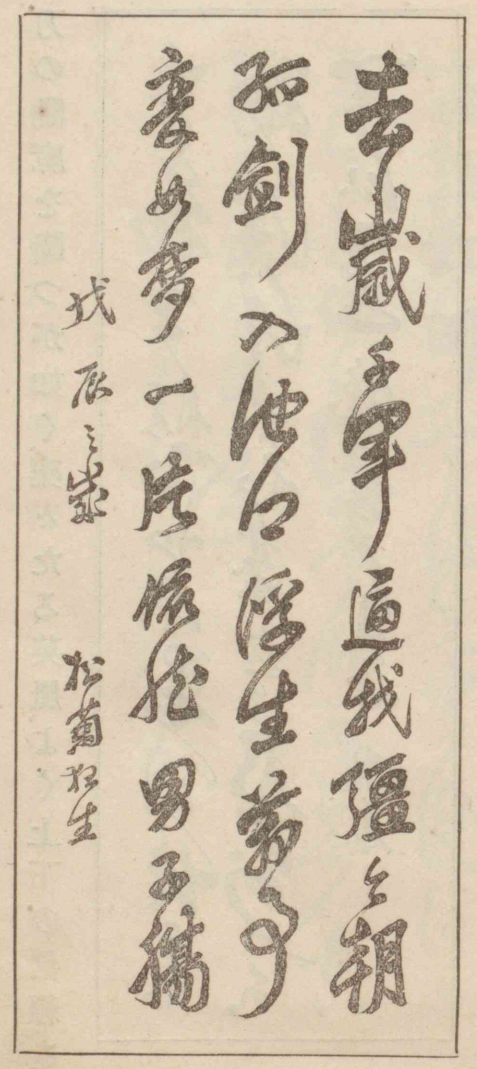
光を耀して居るので、吾人人類は此に始めて意義ある過去を有し、光榮ある現在を有するのである。隨つて吾人の文明は彼等を離れて解釋することは出來ない。吾人の經營しつゝある事業は、彼等の遺業を繼紹して之に新發展を加へんとするに外ならぬのである。古語に「大上は德を立て、其の次は功を立て、其の次は言を立つ。」と云つてあるが、德にもあれ功にもあれ言にもあれ、彼等が人類に及した影響は不朽不滅である。凡そ世の中に、壯快といへば、偉人の事業より壯快なものはなく、崇高といへば、偉人の人格より崇高なものはないのである。

試に思へ。我が國が明治の御代になつてから長足の進歩を爲し、世界の奇蹟とまで稱せらるゝに至つたのも、其の直接の原因は王政の維新にあるのである。さうして王政の維新は幾多の偉人・傑士の努力奮鬪より生じた結果である。

東心　マコト、赤心

經國　國家ヲ治ムルコト。國家ヲ經綸スルコト。

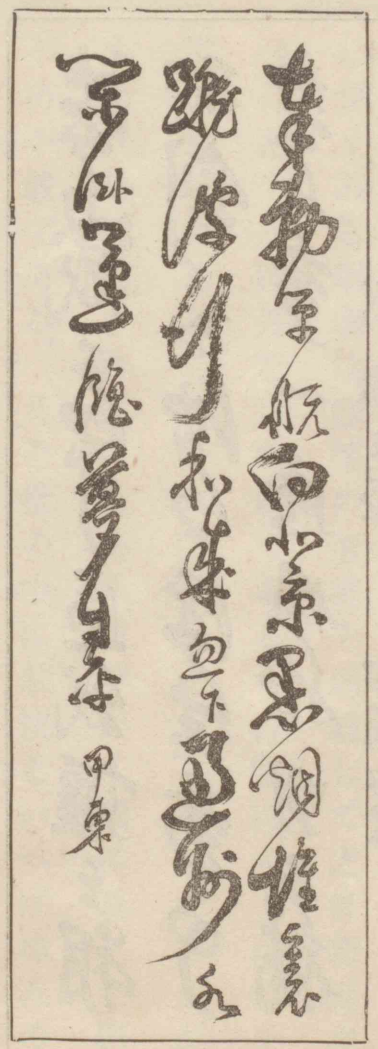
筆蹟
去歲千軍過二我疆一、今朝孤劍入二他鄉一。浮生萬事變如レ夢、一片依然男子腸。
戊辰之歲　松菊狂生。



木戸孝允筆蹟（末松謙澄藏）

至誠皇室を尊び、衷心民人を愛し、大勢の趨く所に着眼して經國の大本を定め、謀慮深遠、規畫周密、大いに皇猷を贊した

のは、彼の木戸松菊であつた。高く自ら任じ、篤く自ら信じ、沈毅端嚴、善く謀り、善く斷じ、時局の紛難を處理すること、快刀の亂麻を斷つが如く、凜々たる英風、よく上下の信頼を得て國家の柱石となつたのは、彼の大久保甲東であつた。光明磊落、規模宏遠、安危利害の上に超脱して、泰然として動かず、曠懷偉度、清濁併せ呑み、赤心を人の腹中に置いて疑はず、

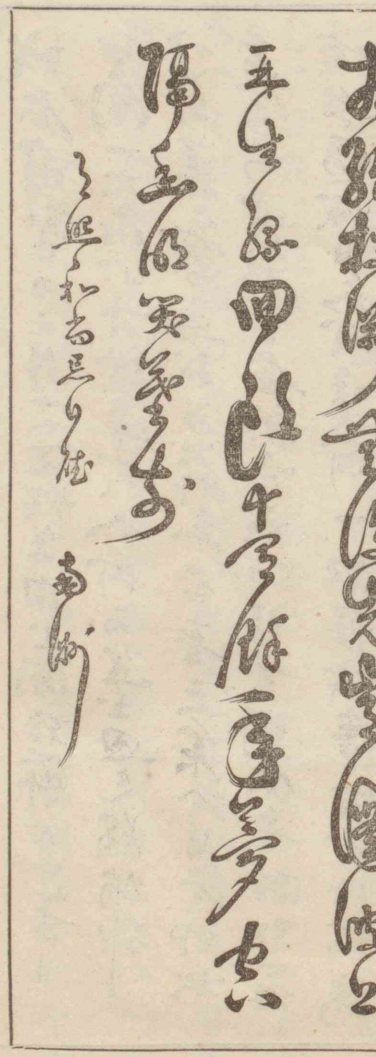


筆蹟

奉レ勅單航向ニ北京一、黑煙堆裏蹴レ波行。和成忽下ニ通州水一、閑ニ臥鑾隱一夢自平。甲東。

大久保利通筆蹟（得能通昌藏）

談笑して天下の勢を制し、國家を盤石の安きに置いたのは、彼の西郷南洲であつた。木戸の識、大久保の斷、西郷の量、三者相俟つて此に天地を旋轉するやうな大業が成就せられたのであつて、世に維新の三傑と稱するも亦偶然でないのである。當時彼等三傑が同心戮力して經國の大業を建て

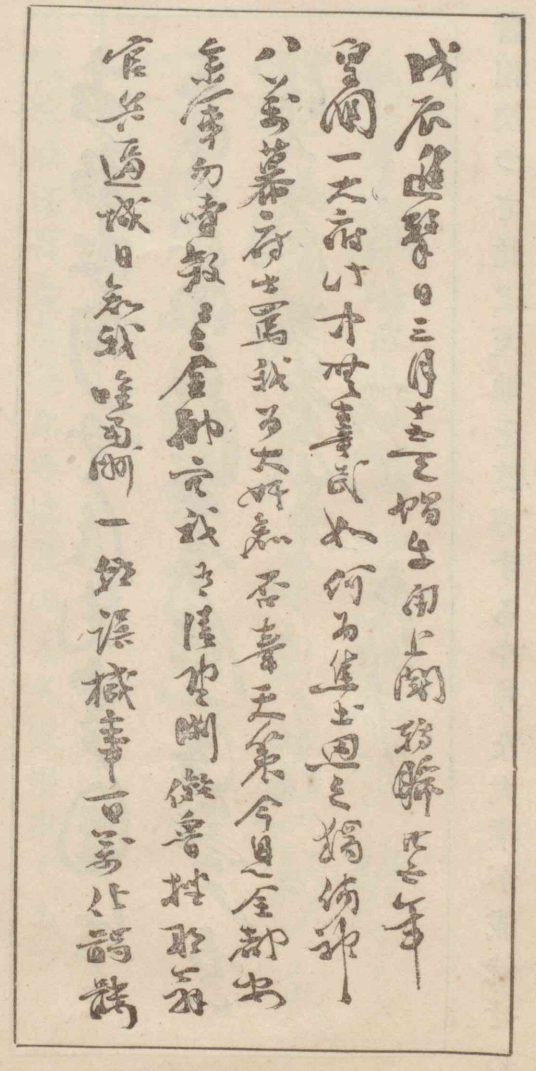


筆蹟

相約投レ淵無ニ後先一、豈圖波上再生緣。回レ頭十有餘年夢、空隔ニ幽明一哭ニ墓前一。月照和尚忌日賦。南洲。

西郷隆盛筆蹟（西郷隆盛記念碑所刻）

つゝあつた時に、他の一面に於ては、奇傑勝海舟の如きがあつて、よく時艱を濟つたのであつた。海舟人となり儁異卓拔、其の炯々たる眼識はよく時局を大觀し、機略縱横、死生の境を行くこと平地の如く、終に幕府をして恭順の實を擧げ



勝安芳筆蹟（書畫大觀）

しめ、生民をして塗炭の苦を免れしめたのであつた。

維新前後は、我が偉大なる國民精神の最も著しく發揮せられた時で、偉人・傑士の風雲に乘じて起つたものは甚だ多かつたのであるが、就中、海舟・南洲の如きは、高山峻嶽の巍々として雲表に聳ゆるが如く、嶄然として頭角を現したものであつて、若し此等の人がなかつたならば、維新回天の事業も斯く速に圓滿なる成功を告げることが出來なかつたであらうと疑はれるほどである。　我が國民が明治の初年に於て、早くも上下心を一にして盛に經綸を行ふといふ國是に從ひ、世界の競爭場裡に進んで大いに國勢を張ることを得たのは、實に此等偉人の賜であつて、吾人國民が景慕の情を

傾けて、之が傳を立て、之が像を掲げ、彼等の墓門既に苔むせる今日、彼等が猶吾人の中に活き、吾人を導いて居るやうに思はれるのも意味のあることである。

猶吾人が想を馳せて維新前に國難に殉じた多數の志士を追懷すると、其の奉公の赤誠、敢爲の志氣、轉〻吾人をして感慨に堪へざらしむるが中にも、吉田松陰・橋本景岳の如きは、最も強く吾人の注意を惹くのである。　西郷南洲は常に「余は先輩に於ては藤田東湖に服し、同輩に於ては橋本左内を推す。　二子の才學器識はとても吾が輩の及ぶ所でない。」といつた。　時に南洲は三十歳、景岳は二十三歳の齢であつた事を思ふと、景岳は我が國の青年偉人中に最も卓越せる者といはねばならぬ。　かれ叡智靈覺涌くが如く、早くも國家の大計に着眼し、一青年の身を以て、政界の大波瀾の中に手腕を試みたのであつた。　彼は不幸にして二十六歳を一期として刑場の露と消えたけれども、彼の志は南洲等の知己に依つて成就せられた。　吉田松陰も三十歳の短生涯を以て非命の死を遂げたけれども、彼の人格は永久に國士の典型として青史を照して居る。　忠愛の至誠、英發の志氣、大義の

轉〻イヨ〻ヨ〻

橋本景岳ハ色白ク女ノヤウナ人ナリキ。初メ西郷ヲ訪レテ大勢ヲ論ジタルニ西郷ハアナドリテ居リタリ。コガ初対ニ基ク博学ナルヲ知ル及ビテモヨリ著ビテ学ビタリ。

感智　適セザル所ヲ又知ラザル所ナキコト。智慧ノ深キコト。

靈覺　スグレテサトク覺イコト。

詩意

國家ノ事ヲ思ハズ。遺ニ却功名ニ萬ニ念休、渾將ニ心事ニ附ニ悠。自聞ニ故人ニ友達ヲ皆隔ミ、累ニ九轉ヲ聞ニ腸悲ニ舊沈淪倦ニ短笛清砧別有ニ秋。

筆蹟　有感

遺ニ却功名ニ萬念休、渾將心事附悠〻自聞

故人友達皆隔ミ、累ニ九轉腸悲舊沈淪倦短笛清砧別有秋

橋本左内筆蹟
（加藤斌蔵維新志士遺芳帖）

哀義　スグレテサトキコト。

大義　最モ重大ナル人倫ノ義務君主又ハ國家ニ對スル民人ノ義務ヲイフ。

英發　スグレテサトキコト。

身を殺して仁をなすといふ志士の本領は、彼に於て最もよく見ることが出來る。彼が一小私塾の教育に盡した熱誠は、幾多の志士を輩出して王政維新の急先鋒とならしめ、明治の御代になつてからも五人の大臣を出した位であつた。吾人は松陰・景岳に依つて、英偉なる人物が少壯期に於て既にかくも貴き事を爲し得るを知ると共に、感歎の情に堪へないのである。

子曰、志士仁人無二求レ生以害二仁一、有二殺レ身以成二仁一。論語。

昭代 昭和の御代。太平の代

五人の大臣
伊藤博文。
山縣有朋。
山田顯義。
品川彌次郎。
野村靖。

二 偉人 その二

嘉納治五郎

かく吾人は明治昭代の起因を尋ねて、幾多の偉人に景仰の情を傾け、感謝の意を表すると共に、此等の偉人の後を受けて我が國の將來を經營すべき少壯國民の任務の重大なるに想ひ到らざるを得ないのである。少壯國民にして自家の任務の重大なるを知る者は、又よく此等の偉人を學んで其の先蹤を繼ぐことを務めねばならぬ。賴山陽は十四歲の少時に、

十有三春秋、逝者已如レ水。天地無二始終一、
人生有二生死一。安得類二古人一、千載列二青史一。

と歌つた。古來の偉人が少年青年の時よりして漸く發達した逕路を尋ねると、多くは前代の偉人を景仰して、感憤興起したのに基づいて居るのである。偉人を景仰するのは青年自然の情であつて、此の情の生ぜぬものは、其の志多く

先蹤 先人の踏み來りたる足跡。轉じて、先人の行ひ來りたる事ノコト。

「史」 何トカシテ古ノ聖賢者ニアヤカリテ、千載後ニテ歷史ヲ照スホドノ偉人ニナリタイトノ意。

頑夫、諂ニ子物事ノ理ニ通セサルモノ。

は低劣で、其の行亦多くは鄙陋である。吾人は前偉人に活理想を求めて、此に志氣を振ふことが出來るのである。志氣が振つて、此に向上發展の途に就くのである。

固より、古來偉人の人格には、おのづからにして卓越したものもある。偉人の事業には、時代の大勢が與つて其の背後の力となつて居るものもある。それで偉人を學ぶものが、誰も皆偉人となり得るといふことは難い。併し偉人を學ぶことに依つて、天才ある者は益〻之を英偉に發揮することが出來、凡庸なものも其の人として最高度の發展を爲し得るのである。孟子は「聖人は百世の師なり。伯夷・柳下惠是なり。故に伯夷の風を聞く者は、頑夫も廉に、懦夫も志を立つるあり。柳下惠の風を聞く者は、薄夫も敦く鄙夫も寛なり。百世の上に奮ふ。百世の下、聞く者興起せざるなし。」と云つた。偉人を學ぶべき者は、獨り偉人には限らない、懦夫も鄙夫も、皆偉人に依つて鼓舞せられ、激勵せられ、感化せられ、指導せられ、以て向上の生活に進むのである。

聖人は百世の師
孟子曰、聖人百世之師也。

伯夷柳下惠是也。故聞二伯夷之風一者頑夫廉懦夫有レ立レ志。聞二柳下惠之風一者薄夫敦鄙夫寛。奮二乎百世之上一。百世之下聞者莫レ不二興起一也。非二聖人一而能若レ是乎。而況於下親二炙之一者上乎。

且古來凡庸を以て嘲られ、微賤を以て輕んぜられたものが、他日巍々として衆目を驚かすやうな發展を爲し得た事が少からず史上に存するのを思ふと、今日不幸な境遇に生活し、凡庸愚劣と評せられて居るものも、決して失望自棄するを要しないのである。前に列擧した維新前後の六偉人の如きも、何れも皆微祿の士であつた。南洲特に海舟の如き

夭折＝若死。

王侯將相
壯士不レ死即已。死即舉二大名一耳。王侯將相寧有レ種乎。史記。

は眞に赤貧洗ふが如きものであつた。松陰・景岳の如きは、生來虛弱多病であつた。南洲の如きは少時極めて魯鈍と」いはれたものである。松菊・甲東の如きも、少時は意氣の壯なのみで、特に英才の煥發したわけではなかつた。若し彼等が精勵刻苦して勳功を建つるに及ばず、不幸にして夭折したならば、青年偉人として後世に傳へらるべきことは何もなかつたであらう。此等のことを思ふと、「我も人なり、彼も人なり。」といふ思想は、決して僭越狂妄として排斥すべきではない。

王侯將相寧種あらんや。」といひ、「英俊とは凡常の士の發憤勉勵したるものゝみ。」といつたのも無理ではない。顏淵は「舜

顏淵ハ孔門ノ哲人。
年才ニシテ死ス。
世ニ孔子ヲ聖ト言ヒ顏淵ハ
亞聖。孟子ヲ大賢トヲツタ。

何人ぞ、予何人ぞ。」といつた。有爲の士の志を立つることは常に此の如きものである。

今や我が國は世界の日本として大活動大發展を爲すべき時に臨んでゐる、公私各般の事業に於て英偉なる人物を要することは甚だ急なのである。今日の多數青年の中、誰かよく前英に續ぎ、來者に先だつて大業をなすであらうか。偉人を師として奮起するは終生の最大快事であつて、假令運命は其の人をして偉人の名を成さしむるに至らずとも、我として最高の發展を爲し遂ぐることを得たならば、人生の目的は此に達せられたと謂ふべきではあるまいか。

（青年修養訓）

杉浦重剛
東宮御學問所御用掛。日本中學校長。安政二年（一八五五）生。

慷慨家
國事又世事ヲ憂ヘナケキ
子奔走スル人、
松陰ノ松陰ナル所以ノ一
一言一行至誠ニ發ス
所以ノ二
實踐躬行
所以ノ三
學和漢ノ海ニ通ジ活用ス
旨トス

三　吉田松陰

杉浦重剛

徳川時代の末造に當りて尊王攘夷の説を唱へし者、其の人頗る多し。然るに吉田松陰が獨り尊攘家の中に立ちて一頭地を抜き、偉大なる感化力を後世に及ぼすもの、蓋し其の故なくんばあらず。蓋し松陰は尋常一様の慷慨家にあらずして、一言一行至誠に發す。是松陰の松陰たる所以の一なり。松陰は能く言を立つ。而も議論のみを以て滿足する人にあらず。言ふ所必ず之を行ふ。所謂實踐躬行の人なり。是松陰の松陰たる所以の二なり。松陰、學和漢に通じ、活用を旨とす。然れども松陰の活眼は、徒に和漢の學に

キョクセキ
跼蹐、東縛セラレテ自由ノ
フルマヒヲモシ得ザルコト、
此ノ二句ヨリ一ツノ熟語ニシ
タリデアル。

アフサウ
押送、刑事被告人、若シクハ
罪人ヲ或官衙ヨリ他官衙
ヘ送ルコト。

跼蹐するを好まず、汎く眼を海外に放てり。是松陰の松陰たる所以の三なり。今少しく之を詳説すべし。

吉田松陰像（松浦無窮畫吉田庫三藏）

松陰は元來至誠の人なれども、讀書の功によつて益〻至誠の尚ぶべきを知り、苟も至誠を以てせば天地の間物として動かざるなしといふ見解を持したるが如し。安政六年五月幕府の嫌疑を受け、將に江戸に押送せられんとするや、豫め生還の期し難きを知り、諸友相謀り松浦無窮をして松陰の像を畫かしむ、松陰自賛を作る。其の

諸葛　蜀の諸葛孔明。劉玄德の三顧に感じ出仕へて天下三分の計を立つ。

賈彪　後漢の桓帝の臣。黨禁起りし時洛陽に入り皇后の父に說き遂に黨人を赦さしむ。

貫高　趙の相。漢の高祖の侮慢を怒りて弑せんとす、事露れて自刎す。

魯連　齊の人魯仲連。秦趙を圍みし時進んで難を釋く。

詩に曰く、

三分出廬兮諸葛已矣夫一身入洛兮賈彪安在哉
心師貫高兮而無素立名志仰魯連兮遂乏釋難才
讀書無功兮據學三十年滅賊失計兮猛氣廿一回
人識狂頑兮鄉黨終不容身許家國兮死生吾久齋
至誠不動兮自古未之有人宜立志兮聖賢敢追倍

（吉田松陰自贊）

を知るべし。至誠一貫、是實に松陰の本領にして、「至誠不動兮自古未之有」の語は最もよく松陰の人となりを示すものと謂ふべし。余が松陰に對して言ふべからざる同情を表し、四十年來欽慕して止まざる者、主として玆に存す。

實踐躬行も亦松陰の松陰たる所以にして、また余が松陰に心服する所なり。若し松陰をして單に口舌の人たるに止らしめば、偉大なる感化力を有すること能はざりしならん。例へば松陰の詩に現れたる「安得天詔勅六師、坐使皇威被八紘」と云ふ語が、尋常詩人の傲語と同じからんには、松陰の價値安くにか在る。然るに松陰は米艦に投じて海外に航し、象山の謂へる如く「周流究形勢」の後、歸來我が國の爲に根本

送吉田義卿　佐久間象山

之子有壁畫　久厭敝屋壁畫
奮衣萬里道　心事未說人
雖則不語人　情愛或方因
逆行出鄙門　孤鶴橫秋空
環海何茫々　五州自為鄰
周流定九州　見超百聞
智者思貢投機　歸來須及辰
不立非常功　身後誰能賞
蹉跎（蹉跎ハ中ヲイザリアルクナリ即チ平凡ナ用）
寧セシリ神ニ祭ラレン

的の對外策を立てんと試みたり。不幸にして投艦の意を果さゞりきと雖も、松陰は此の時を以て筆を棄て口を鉗み、實行に移らんとしたるなり。之無くんば松陰無し。事敗れたりと雖も、而も余は此の事に於て始めて松陰の松陰たる所以を認むる者なり。松陰の著書頗る多し、其の精力の旺盛なるは則ち多とすべけれども、著書萬卷未だ松陰の價値を定むるに足らず。松陰に實踐躬行の精神ありて松陰の價値始めて定まる。要するに、松陰は筆舌の人に非ずして實行の人なり。

第三に余が松陰に服せる所は、其の活眼に在り。當時の時勢に徴すれば、尊王説は無論可なり、攘夷の説亦必ずしも不可なりとせず。然れども眼界狹小にして一國の外に出でず、列國の強弱をも審にせず、世界の大勢をも窮めずして、徒に攘夷の説を主張するは、短視近眼の嫌なしとせず。苟も國事を論じ身を以て國家に許す志士としては頗る物足らぬ感なきを得ざるなり。然るに松陰は學和漢に渉ると雖も、西洋の事情は多少自らも研究したりしならんが、佐久間象山に就いて大體を學び得たる外、未だ深く斯の方面に通曉したりしことを聞かざるにも拘らず、夙に眼を海外に注ぎ、彼我の情勢を併せ知らんとしたり。是活眼の士にあらざれば能はざる所なり。松陰が下田獄中の詩に、

不審夷情何馭夷、　夷情深遠酷難知。

自今海外ニヤラズシテトラヘラレメハ國家ノ損アリ、我ガ身ノ辱ナリ！

支那人

東表

南蠻

中華

西戎

荒狄

願使 アゴヲ人ヲ遣コト

航海誤來天下計、男子寧作一身悲。

といへる一首は、善く人の記憶する所にして、而して松陰の志を見るべし。若し松陰にかゝる活眼なかりせば、松陰の尊攘説は、何等の異彩も生命も無かりしならん。而して松陰の活眼は、右に擧げたる七絶の外、米艦に投ぜんとしたる時の陳情書に依りても之を知るべし。松陰の氣慨を以て當時外夷・西蕃と罵り居たる米國人に向ひ、如何なる苦役をも甘んじて其の願使に任ぜんとの意を示すに至りては、其の決心の尋常に非ざるを知るべく、殊に「生等終身奔走、不過出東西三十度南北二十五度之外」と曰ふが如きに至りては、實に松陰の活眼を具へしことを證するものと謂ふべし。

固より投艦航洋の擧に關しては師象山の鼓舞與りて力あるは勿論なれども、抑亦松陰の天性松陰をして此に至らしめたるにあらずやと思はる。何れにしても松陰の活眼は、其の至誠・實行ともに、松陰の本領として認めざるべからざる所のものなり。

以上敍べたる如く、松陰の至誠、松陰の實行、松陰の活眼は、確に松陰の本領に相違なし。此の本領に依りて推す時は、松陰は一人にして優に寛政三奇士の特長を兼備したる如き人物なりしかと思はる。之に加ふるに、松陰は其の學術と氣節とを以て一藩の子弟を教養し、其の至誠は能く此等の少年を感化し、遂に長州をして維新の主動者たる地位に立

たしめたるは爭ふべからざる事實なりとす。其の身は僅かに三十歳にして刑場の露と消えたれども、其の氣は永く天地の間に在りて、今に至るまで猶後進を鼓舞する勢力を有することも亦掩ふべからざるなり。（吉田寅次郎）

四　天職

國木田獨歩

國木田獨歩
名は哲夫。文學者。明治四十一年歿す年三十八。

筆研筆ト硯、書籍文ニテ、文筆ニタヅサワル者ノ起居ノ義ニアラ

其後筆研恙なく候や。御書狀に依れば、餘り讀書の時間も之なかりし如くに候へども、實際多少御勉強御觀察の事と奉察候。僕は大兄が僕等のために詳細なる觀察記を示されんことを希ひ候。

小生相變らず眞面目なる生活を續け居候間御安心被下度候。尤も讀書の分量より言へば、殆ど進歩は御座なく候へども、顧みて眞面目といふ點に就いて言へば、大兄と別れてより又一段の進歩を得たる如く覺え候。僕は自ら顧みて一日一處に止り居ることは殆ど死するよりも苦しく候。

僕の天職は已に定まり候。詩人たることは僕の天職に御座候。僕は詩人たるべし、其の大なると小なるとを問はず、僕が天職は信念高き詩人たるにありと固く信じ候。文筆は僕に離る可からざる因緣に候。但し茲に詩人と申すは、最も廣き意味にして最も強き意味に候。僕如何なる事ありと雖も、一生を眞面目ならざ

陳腐ノ思想 古ヘクサキ考ヘ、

文壇 文學者ノ社會

Jesus. christ 世界的ヤ人。

Socrated. 奉職ノ忠ナル者。

る仕事に投ずる能はざる以上は、徒に華麗の句、陳腐の思想を羅列して自ら安んずる者に御座なく候。僕は只僕の信ずる所に向つて驀地に猛進すべし。是は餘程以前よりの決心に候へども大兄の外誰にも申さず、實際吹聽する必要なし。僕自ら詩を取りて文壇に現れたらん時は兎も角、其迄は御他言無用に御座候。天は必ず僕の天職を認め給ふと確信するが故に、僕に在りては、義務の精神火の如く大風の如く怒濤の如く炎の如くに候。天若し僕に健康を假し給はゞ、僕は必ず天職を完うす可し。大なる信念の火なるかな。僕心耳を傾けてクリストの裡に、ソクラテスの裡に、ウォーツウォースの裡に、カーライルの裡に其の他眞面目にして信念の眞の火ありし人々の裡に、天の聲、永久の聲、眞理の聲、渇仰に堪へざる聲を聞く。而も自ら未だ其の聲を歌ふ能はず、叫ぶ能はず。思うて茲に至れば、血管破裂せんとするばかりに候。されど亦自ら慰むる所あり。歌ふもの必ずしも眞の人に非ず、叫ぶ者必ずしも眞の人に非ず。歌はんと欲して歌ふ能はず、叫ばんと欲して叫ぶ能はざる人も眞の人、永久の生命を認めたる人なることを確信致候。されど僕は詩人なり、必ず歌ふべし、必ず叫ぶべし、必ず宣言すべし、必ず敎ふべし、余の力の及ぶだけは。

大兄の天職は未だ定まり候はずや。世に天職の定まらぬ程苦しきことはなし。僕は此の苦しき經驗を過去二年の間に嘗め盡せり。大兄未だ決するなくば、必ず此の盃は受けざる可からず。兄に忠告するは、決してせくことなかれ、十分此の苦き盃を受けよ。考ふべし、爭ふべし、泣くべし、而して後、光必ず來らん。光來りて後猛然として進むべし。自家の大決心なきに、一時の皮相なる事情に堪ふる能はずして早急に天職を定むる勿れ。只君が良心の再考三思の上に於て、人生尤も眞面目にして且己の特質に適すと信ずるものに向つて五十年の熱血を注ぎ給ふべし。くれ〴〵も申上

不忍池ノ畔ニ居ル。國學者。通稱玄長。サヾナミヤヒトセラス。泊酒舍と號す。文化七年（一八一〇）歿す年四十九。故ニ連ト云フ。

清水濱臣

候、決して世俗的の計算を天職の上に加ふることなかれ。今日花さき、今日散る者を植ゑんより、五十年一粒を下し、千年一果を結ぶと信ずる所に進まるゝが御互今日迄の修養と存候。

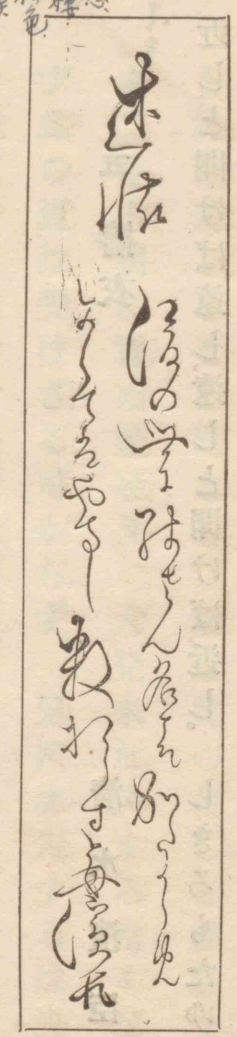
餘り長文になれば、今日はこれにて閣筆致候。追々暇をぬすみて貴意を得べく候。大兄よりも熱血文字を寄せられんことを待居候。草々。（獨歩書簡）

五 擣衣

清水濱臣

近しと聞けば遠し、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。かりがねの聲の砧を誘ふにやあらん、

砧の音のかりがねに通ふにやあらん、あなあやし、く。そ



清水濱臣筆蹟
（書畫大觀）

みなあらず。きく人の心のさびしきなり。（泊洒舍集）

もこの音の悲しきか、住む里の淋しきか、打つ折の憂き故か。

子夜呉歌　李白

長安一片月
萬戸擣衣聲
秋風吹不盡
總是玉關情
何日平胡虜
良人罷遠征

子夜春歌

陌頭楊柳枝
被春風吹
妾心正斷絶
君懷那得知

子夜、すの名。
春ノ夫ヲ思フヲ歌フヲ歌デ非常ニ有名ナリ。

関契
閨中ノ婦不知愁
春月凝粧上翠樓
忽見陌頭楊柳色
悔教夫壻覓封侯

ゆきかへる巷の柳枝ふれて、春の山風ふゆかるめり。心乱れてこのうらぶれをこひしき人のしるべくもがな。

伴蒿蹊
國學者。名は資考。文化三年（一八〇六）歿す年七十四。

六　里祭

伴　蒿　蹊

葉月・長月は田舍の神祭多かり。今年は別きて二百十日二十日とて恐るゝ風の煩もなく、早稲は疾く刈りはて、中稲・晩稲すぎ〳〵にあからむ。足穂の心ゆくに賑ひまさりて、ふるびたる太鼓張りあらため、神主の烏帽子裝束さらに調じなど、新米の餅、新搾の神酒に鰭物・干肴取並べたる神供まゐり、或は神樂の拍子のしどろなるを奏し、或は相撲してとよめくもあり。またさばかりの式だになくて、唯里長を始め老いたるも若きも拜殿に打集ひ、酒に醉ひしれて珍しげなきなりはひの物語を大聲に語りあふ樂しさを神わざなりなど思へるも見ゆ。こはなか〳〵賀茂祭のおほやけぶり、祇園會のきら〳〵しきよりものどやかに、「家々醉人を扶けて歸る。」と聞ゆる唐土の社日の様さへ通ひて、神も嬉しとみそなはし給ふらんかし。（閑田文草）

とよめく〳〵動揺めく、

醉ひしれて醉痴れて、
なりはひ生業。
賀茂祭六月賀茂ノ祭トモ云フ。
買中西ノ中西。
家々醉人を扶ける
鵜湖山下稻粱肥、豚柵雞塒半掩扉。柔柘影斜秋社散、家々扶得醉人歸。社日。王駕。
物ヲ刈リ取ル時トテ田辰ノ日ハ大切ナ。一年ニ二回アリ。
みそなはし給ふ
社日
春分ノ後ノ戊日
秋分
寿、種ヲ蒔キ秋ハ物ヲ刈リ取ル時トテ田辰ノ日ハ大切ナ。一年ニ二回アリ。

名物＝狂句＝川柳。
川柳ト云ハ柄井ト云フ人ノ號ナリ。
俳句ハ五、七、五ニ調ヘル。
之ハ切字ト、季ト、ガ必要ナリ。
切ル季
暖ヤ梅ガ香ノ如クト云ヒ止メル。
狂句ハ前置ヲ前句ト云ヒ、後ヨリ付ケタル附句ト云フ。
五七七。　七七。
袋句
甲ハ乙ニ　御ち町ヨリ矢ヲ使ひ。
まちつとるゆ
ゆかしりゆやつりそに
ゆかしりゆやつりそに　婦ヲ呼ビ
我れと　婿入に合ひの障子は　穴ばかり。
丸と丸　四角長し短し
丸盆ニ百ニ角ヲ　ヨセテ入リケンバ。
月ヲ泣く童　井筒ノ縁えべ。

七　名物

名物を食ふが無筆の旅日記。　　柄井川柳（八右エ門）

千客萬來、皆來ると困るなり。

雪隱へ先ヲコサセテ月ヲ入れ
仲人は雨まかほうえて丸くるり
愛乃手拭鏡ほどのうそをつく

轉寐の顔へ一冊屋根にふき。

武者一人叱られてゐる土用干。

本降になつて出てゆく雨やどり。

抑へればすゝき、放せばきりぐ〜す。

よつびいてひようと放さぬ案山子かな。

手の甲へ餅を受取るすゝはらひ。

通りぬけ無用で通りぬけが知れ。

泣く〜も良い方を取る形見わけ。

芭蕉は飛びこみ、道風は飛びあがり。

昔ニ支那ノ渭濱ノ呂望、文王ニ逢ヒ、宰相ニナリ、三代ノ間ヘチ居タリ。

釣れますかなどと文王そばへ寄り。

近松門左衛門
戯曲作家。享保九年（一七二四）歿す年七十二。

親子
鄭芝龍鄭成功父子。

李蹈天
明朝に仕へて右軍の將となる。後、韃靼に内應して明帝を殺す。

吳三桂
明朝の忠臣。仕へて司馬大將軍となる。

八　千里が竹　その一

近松門左衛門

船路の末も知らぬ火の筑紫は雲に埋めども、跡に擁護の神風や、千波萬波を押しきつて、時も違へず親子の船唐土の地につきにけり。鄭芝龍一官は故郷に歸る唐錦、裝束引換へ妻子に向ひ、「我が本國といひながら、時移り、世變り、天下悉く李蹈天が引入れにて韃靼夷の奴となり、昔の朋友・一族とて誰を尋ねん樣もなく、司馬將軍吳三桂が生死の樣子も知らざれば、何を以て義兵の旗をあげ、何處の一城に立て籠るべ

娘の子 錦祥女。

吳將軍甘輝 明の將軍。後韃靼に降りしが、幾ならずして又之に叛き鄭芝龍に應ぜり。

き處もなし。然るに某去んぬる天啓五年、この國を立ちのき、日本へ渡る時、二歳になりし娘の子を乳母の袖に捨置きしが、その子が母はうみ落して當座に死す。かくいふ父は八重の汐路の中絶えて、いつ父母も知らぬ身が、育てば育つ草木の雨露の恵に長ずる如く、天地の父母の助にや、成人して、今吳將軍甘輝といふ大名、一城の主の妻となりし由、商人の便に聞及ぶ。頼む方はこればかり。親を慕ふ心あつて娘さへ承引せば、聟の甘輝も安々と頼まるべし。これより道の程百八十里、連れては人も怪しまん。われ一人道をかへ、和藤内は母を具し、日本の漁船の吹流されしと頓智を以て人家に憩ひ、追附くべし。これより先は音に聞ゆる千里

が竹とて虎の栖む大藪あり。それを過ぐれば潯陽の江。これ猩々の栖む處。風景聳えし高山は赤壁とて、昔東坡が配所ぞや。それよりは甘輝が在城獅子が城へは程もなし。その赤壁にて待揃へ、萬事を示し合すべし。」と、方角とてもしら雲の日影を心おぼえにて、東西へこそ別れけれ。

近松門左衛門

教に任せ、和藤内、人家を求め忍ばんと、かひ〴〵しう母を負

ひ、たづきも知らぬ岩巖石、古木の根ぎし瀧つ波、飛びこえ跳ねこえ飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明山、人里絶えて廣々たる千里が竹に迷ひ入る。和藤内ほう(呆)と我をぬかし、「のう母ぢや人、この腰骨に覺えたり、もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふことか、行けば行く程藪の中。むう、わかつたり、方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅さば魅せ。宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯の相伴。」と根笹・大竹押分け蹈分け、猶奥深く行くさきに、怪しや數萬の人聲。攻鼓・攻太鼓・喇叭・ちやるめら、高音をそらし(兎)、ひよう〳〵とこそ聞えけれ。「すは(薬の碑)、我々を見咎めて、敵の取卷く攻太鼓か、又は狐のなすわざか。」と茫然たるその折節、空凄じく風起

虎嘯けば　虎嘯谷風起龍　興景雲浮。

楊香　晉の人。赤手虎を搏して父の危を救ふ。

り、砂を穿ち、どう〳〵〳〵、竹葉さつと卷立て卷立て、吹折る竹は劍の如く、凄じなんどもおろかなり。

和藤内ちつとも臆せず、「讀めたり、さては異國の虎狩なり。あの鐘・太鼓は勢子の者。こゝは聞ゆる千里が竹。虎嘯けば風起る。猛獸の所爲と覺えたり。二十四孝の楊香は孝行の德に因つて自然と逃れし惡虎の難。その孝行には劣るとも、忠義に勇むわが勇力。唐へ渡つて力始め、神力ますます日本力、刃で向ふは大人氣なし、虎はおろか、象でも鬼でも一挫ぎ。」と、尻ひつからげ、身繕ひ、母をかこうて立つたるは、西天の獅子王も畏れつべうぞ見えてける。

案に違はず吹く風と共に暴れたる猛虎のかたち、藤根に面

をすりつけすりつけ、岩角に爪磨ぎ立て、二人を目がけいがみ懸るを事ともせず、弓手に擲り、馬手に受け、捩つて懸れば身をかはし、撓めばひらりと乘移り、上になり下になり、命競べ根競べ、聲を力にえい〳〵、虎の怒り毛、怒り聲、山も崩るゝごとくなり。和藤內も大童、虎も半分毛を毟られ、兩方共に息つかれ、石上に突つ立てば、虎も岩間に小首を投げ、大息ついたるその響、鞴吹くが如くなり。

母藪蔭より走りいで、「やあ〳〵 和藤內、神國に生れて神より受けし身體髮膚、畜類に出であひ力立てして怪我するな。日本の地は離るとも、神はわが身にいすゞ川、大神宮の御祓、納受などか無からんや。」と、肌の守を渡さるれば、「げに尤も。」と

押戴き、虎に差向け差上ぐれば、「神國神祕のその不思議、猛りに猛る勢も、忽ち尾を伏せ耳を垂れ、じり〳〵〳〵と四足を縮め恐れわなゝき、岩洞に匿れ入る。をづつを攫んで跳ね返し、打伏せ打伏せ、ひるむ所を乘つ懸り、足下にしつかと蹈まへしは、天の斑駒、素戔嗚尊の神力、天照らす神の威德ぞ有難き。

九 千里が竹 その二

近松門左衞門

かゝる所に勢子のもの群がり來るその中に、大將と覺しき者大音揚げ、「やあ〳〵、うぬはいづくの風來人、我が高名を妨ぐる。その虎は忝くも主君右將軍李蹈天より韃靼王へ獻

しをらしい（殊勝らしい）

上のため狩出したるものなるぞ。早々渡せ。異議に及ばば打殺さん。じやくはんじやくはん。」とぞわめきける。李蹈天と聞くよりも願ふ所と笑壺に入り、「やあ、餓鬼も人數、しをらしい事ほざいたり。身が生國は大日本。風來とは舌長し。さほど欲しがる虎ならば、主君と頼む李蹈天とやら、石花菜（トコロテン）とやら、こゝへつき出し、詫言させい。直に逢うて用もある。さもないうちは、いつかな事、ならぬ、ならぬ。」とねめつくる。「やあ、物ないはせそ。打取れ。」と、一度に劍をばらりと拔く。「心得たり。」と護符を虎の首にかけ、母の側にひつすうれば、繫ぎしごとくにはたらかず。「おゝ心易し。」と太刀差翳し、群がる中へ割つて入り、八方無盡に割りたて割りたて撫でまくる。

勢子の大將安大人、官人引具し立歸り、「おのれ老耄餘さじ。」と一文字に切りかゝる。猶も神明擁護の驗、神力虎に加つて、むつくと起きて身慄し、敵に向ひ齒を鳴らし、猛りうなりて飛蒐る。「こは適はじ。」と安大人、勢子の差いたる劍・かり鉾・數槍、手にあたるを幸に、投附け投附け打ちかゝる。虎は神力自在を得、劍を宙に引つ喰へ、岩に投げあて微塵になす。双の光玉散る霰、氷を碎くに異ならず。双物盡くれば、官人ども、色めき立つて逃げ迷ふ。後より和藤內、「どつこい遣らぬ。」と顯れいで、安大人が素首を掴んでさし上げ、くる〳〵と振りまはし、えいやつと打ちつくれば、岩に熟柿を打つ如く、五

體ひしげて失せにける。

此の勢に官人原、後へ戻れば、惡虎の口、先へ行けば和藤內、仁王立に突つたちたり。「あゝ、申し御堪忍、御免、御免。」と手を合せ、土に喰ひつき泣きゐたり。和藤內虎の背を撫で、「うぬらが小國とて侮る日本人、虎さへこはがる日本の手練を覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が悴、九州平戸に生長せし和藤內とは我が事なり。先帝の妹宮、栴檀皇女に巡り逢ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故鄕へ立歸り、國の亂を治むるなり。さあ、命惜しくば味方につけ。否といへば虎の餌食。否か、應か。」とつめかくる。「喃、何の否で御座りませう。韃靼王に從ふも、李蹈天に從ふも、命が惜しさ。向後お

前の御家來ども、お情賴み奉る。」と地に鼻つけて畏まる。

「おゝ、でかした、でかした。さりながら我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はん。」と、指添の小刀外させ、是も當座の早剃刀、母も手々に受取つて、並ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端そるやらこぼつやら、絲鬢・厚鬢、剃刀次第、瞬くひまに剃りしまひ、二櫛半のばらけ髪、頭は日本、髭は韃靼、身は唐人、互に顏を見合せて、頭ひやつく風引いて、「くつさめ〳〵、村雨々々。」と、涙を流すぞ道理なる。

親子どつと打笑ひ、「揃ひも揃うた供廻り、名も日本に改めて、何左衞門・何兵衞・太郎・次郎・十郎まで、面々國所頭字に名乘り

お先手の手振り衆（先キヘ行キ手ヲ出ス人）

二行に立つてほつたてろ。」「承り候。」と、お先手の手振の衆ちやぐちう左衛門・東蒲塞右衛門・呂宋兵衛・東京兵衛・暹羅太郎・占城次郎・ちやるなん四郎・ほるなん五郎・うんすん六郎・すん吉郎・もうる左衛門・ぢやが太郎兵衛・さんとめ八郎・英吉利兵衛、今參のお供先、あとに引馬、虎斑の駒、母を助けて孝行の名を取る、口取る、國を取る。譽は異國・本朝に蹈み跨げたる鞍鐙、虎の背中に打乘つて、威勢を千里に顯せり。（國姓爺合戰）

一〇 相模灘の落日

徳富健次郎

徳富健次郎。蘆花と號す。文學者。明治元年生。

秋冬、風全く凪ぎ、天に一片の雲なき夕べ、立つて伊豆の山に落つる日を望むに、世にかゝる平和のまた多かるべしとも

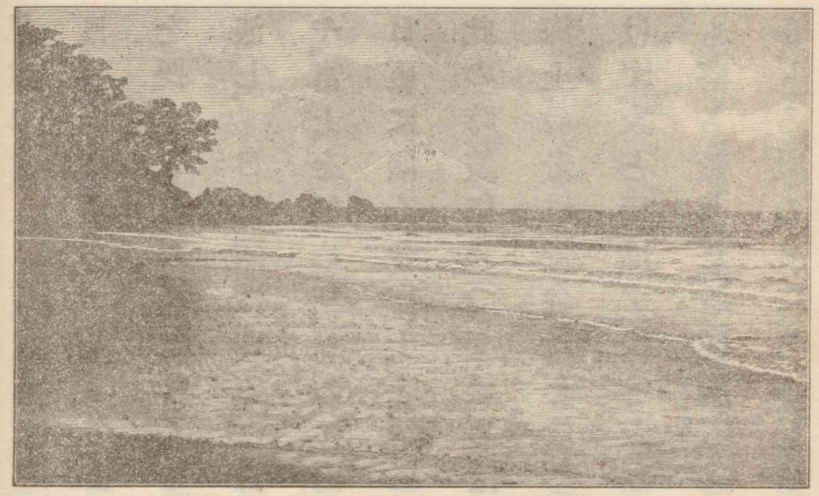
生簀（イケス）　魚ヲイケオクトコロ、籠ボ

思はれず。

日の山に落ちかゝりてより其の全く沈み了るまで三分時を要す。日の西に傾くや、富士を始め相豆の連山煙の如く淡し。日は謂はゆる白日、白光、爛として眩し。日更に傾くや、富士を始め相豆の連山次第に紫になるなり。日更に傾くや、富士を始め相豆の連山、紫の肌に金煙を帶ぶ。此の時、濱に立つて望めば、落日海に流れて吾が足下に到り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱一帶、山と云はず、砂と云はず、家と云はず、松と云はず、人と云はず、轉りたる生簀の籠も、落ち散りたる稾屑も、赫焉として燃えざるはなし。

かゝる凪の夕に落日を見る身は、恰も大聖の臨終に侍する

舊に仍つて
セトノトホリ



相模灘を隔てゝ富士山を望む

感あり。莊嚴の極、平和の至、凡夫も靈光に包まれて肉融け、靈獨り端然として永遠の濱に彳むを覺ゆ。物あり、融然として心に浸む。喜と云はんは過ぎ、哀れと云はんは未だ及ばず。

已にして日愈落ちて伊豆の山にかゝるや、相豆の山忽ちにして印度藍色に變ず。唯富士の嶺舊に仍つて紫の上に更に金光を帶ぶるのみ。伊豆の山已

太白当船明似月

遺蘖（ゲツ）
代リタル根株ヨリ生ジタル芽、ヒコバエ、コヽハ明星即チ、金星ヲ太陽ノ遺蘖ト見テイヘリ、

に落日を銜み始めぬ。日一分を落つれば、海に浮べる落日の影一里を退く。日は迫らず、分又分、寸又寸、別れ行く世をば顧みがちに悠々として落ちて行く。

『已にして殘り一分となるや、急に落ちて眉となり、眉切れて線となり、線瘠せて點となり、忽ちにして無し。』眼を上ぐれば世界に日なし。光消えて、海も山も蒼然として憂ふ。日は入りぬ。然も餘光の忽ち箭の如く上射し、西の空、金よりも黄なるを見ずや。偉人の歿せる後、實にかくの如し、

日の落ちたる後は、富士も程なく蒼ざめ、やがて西空の金は朱となり、燻りたる樺となり、上りては濃きプロシア藍色となり、日の遺蘖とも思はるゝ明星の、次第に暮れ行く相模灘

の上に眼を開きて、明日の出日を約するが如きを見るなり。

（自然と人生）

一一 常磐木

島崎藤村

あら雄々しきかな、傷ましきかな、金烏西山の端に入れば玉兎東嶺の頂に登る。

かの常磐木のとはに枯れざる。

常磐木の枯れざるは、

百千の草の枯るゝより

傷ましきかな。

其の枝にかゝる朝の日、

其の幹をめぐる夕月。

島崎藤村。名は春樹。新體詩人。小説家。明治五年生。

あゝ――傷ましきかな。常磐木の葉ケズ枯レザルハ、他ノ百千ノ明治五年生。葉落ホ樹ノ冬ニ至リテ用ヲ成サズ比スレバ論ジ難シ到ニテ悲ノ情ナルコトヲ述ブ

木枯ニ風ニ木嵐

月日の来りて去るなり、去りて去るなり。其ノ過ギ行クコトノ速ナルヲ行客ノ旅ノ迅速ナルニ喩ヘテヨメリナド。

光陰ノ経過ノ迅速ナルヲ電光ニ喩ヘテイフ。

次ノ四季ノ循環ノ迅速ナルコトヲ詠ジ出サン為ニ先ヅ日月ノ経過ノ極メテ速ナルコトヲイヘルモノト知ルベシ。

など行く旅の迅速なるや、

など電の影と馳するや。

蝶の舞、花の笑、

など遊ぶ日の世に短きや、

など其の醉の早く醒むるや。

蟲、草の葉に悲しめば、

一時にして既に霜。

鳥、潮の音に驚けば、

一時にして既に雪。

木枯高く秋落ちて、

自然の色はあせゆけど、

白駒ノ隙ヲ過グルガ如シ。

蝶ノ舞……蝶ムルヤ

楽シキ春ノ過ギ易キヲ述ブ。「蝶ノ舞」トイヒ、花ノ笑ヒトモ云ヒ、「ソノ醉」トイヘルナド、東風トハ人、春ノ風情ヲ現スニ恰当ノ語ナリ。

蟲草ノ葉……既ニ霜

草ノ虫ハ草葉ニスダキテ行水ノ涼ヲ所ニ苦シム秋トナレバ又急ケテ霜ヲ見ル時至ルヲイフ。

鳥潮ノ……既ニ雪、

鳥ハ千鳥ヲイフ、千鳥ハ冬月河海ノ上ニ群リテ鳴ク。海千鳥ハ文字ニモ呼潮ト書カレ、汐サシ来レバ其波ノ音ニ驚キ鳴キテ活ヲサシテ飛ビ渡ルヨシ。

白ノ意ハ千鳥ガ潮ノ音ニ驚キテ鳴ク時候即チ初冬ノ候トナレバ白ケニシテ白雪ヲ見ル時至ルトノ意

草木黄ノ葉ニシテ、天地自然ノ風色何トナク色アセテ淋シクナリユケド

らうたけて＝草木ノウラ（秋）ノ枯ンコト。

大力天を貫きて、
坤軸遂にやすみなし。
ものみな速くうらがれて、
長き寒さも知らぬ間に、
汝千歳の時に嘯き、
獨り立てるは何の力ぞ。
白銀の花霏々として
吹雪の煙暗き時、
汝緑の陰も朽ちせず、
空を凌ぐは何の力ぞ。
立てよ、友なき野邊の帝王、

天地各ソノ位ヲ保チテ、日月星辰ノ運行庶然トシテ、カハルコトナキヲイフ。偉大ナル力ハ天ヲ貫キテ、之ヲ支ヘ、地軸ノ運轉、利那ヲ息ムコトナシトナリ。

常盤木ノ枝ハ冬枯ノ中ニヒトリ常緑ノ姿ニテ千歳ノ時ヲ嘯ク姿ハ寒ニ野辺ノ帝王タル感アリトノ意。

ゆゝしく＝高ク気高ク立派ニ堂々トシテ立ツノ意。

ゆゝしく高く立てよ、常磐木。
汝の長き春なくば、
山の命も老いなんか。
汝の深き息なくば、
谷の響も絶えなんか。
あしたには葉をうつ霙、
ゆふべには枝うつ霜、
千草も知らぬ冬の日の
嵐に咽ぶうきなやみ、
いづれの日にか
氷は解けて、

常磐木ノイモ喜ラメ春ノ色モナク、山野ヲ彩ルコトナクンバ、山ハ生ノ気ヲ衰ヘテ怪ノ人ガ老衰シテ見ルカゲモナキニ至ルガ如ク、夏ノ明ラ衰ヘテンカ。

よし（縦や）＝ママヨ。

その葉の涙
消えんとすらん。
あゝ、よし、さらば、枝も摧けて、
綠の色の褪せなん日まで、
雲浮けば無縫の天衣、
風立てば不朽の小琴。
おごそかに立てよ、常磐木。
あら、雄々しきかな、傷ましきかな、
かの常磐木のとはに枯れざる。
常磐木の枯れざるは、
百千の草の枯るゝより

無縫ノ天衣ハ天上ノ織女ノ著テ縫目ナキ衣。雲命到ラントシテ雲浮ケバ、そレヲ無縫ノ天衣トシテ身ニ纏フノ意。

会議＝詮議。
会＝皆。
公卿会議
十九日 二條天皇平治元年十二月。
信頼卿 右衛門督藤原信頼。父は忠隆。母は光頼の妹。
大臣以下ノ殿上人ヲ召集メテ議スルコト。
信頼ハヨク肥エタ人デアル。
大臣＝左大臣
大納言＝中納言
中納言＝参議
公卿＝左右
頭＝助＝允＝属
雑色＝イヤシキモノ。使者。

- 信頼
- 光頼
- 惟方
- 女
- 顕頼
- 藤原顕隆
- 顕長
- 長方

傷ましきかな。（藤村詩集）

一二 光頼卿の參内

さる程に、内裏には同じき十九日公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿この程は信頼卿の振舞過分なりとて、不參にておはしましけるが、參内して承らんとて、殊に鮮かに束帯引繕ひ、蒔繪の細太刀おとしやかに佩き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に腹卷着せ、雑色の裝束にいでたゝせ、「自然の事もあらば、人手に懸くな、汝が手に懸けて光頼が首をばいそぎ取れ。」とて御身近く置き、その外、清げなる雑色四五人召具して、大軍陣を張りて處々門々を堅く守護しけ

さき高らか 叢聲

上臈トハ年功ヲ経タ位ノ高イモノヲ云フ。

るを事ともせず、さき高らかに追はせて入りたまへば、兵ども大いに恐れ奉り、弓を平め、矢をそばめて通し奉る。紫宸殿を經て、殿上を廻りて見たまへば、信頼卿一座して、その座の上臈たち皆下にぞ着かれける。光頼卿「こは不思議のことかな。人はいかにふるまふとも、彼は右衛門督、我

上ノ方ノ手ヲ長クノガ袍。袍ノ長イハ一丈三尺位アル云フ。

蒔絵太刀

笏

袴

東帯（裝束着用圖）

色代 顔色ヲ改メテ礼ヲ厚クスルトイフ。人ニ礼ヲスル。揖礼。

宰相 宰相参議の唐名。定員八人。

あさましし。ものぐるほしい。驚くばかりあきれかへる。

は左衛門督なれば、下には着くまじきものを。」と思はれければ、左大辨宰相長方卿末座の宰相にておはしましけるに、「今日の御座席こそよにしどけなう見え候へ。」と色代して、しづしづと歩み、信頼卿の上にむずと着きたまふ。光頼卿は信頼卿のためには母方の叔父なる上、大力の剛の人なれば、ことに恐れて見えられたり。右の袖の上に居懸けられて、伏し目になりて色を失はれければ、着座の公卿、「あなあさまし。」と見たまふに、光頼卿下襲ねの尻引直し、衣紋繕ひ、笏取直し、氣色して、「今日は衛府督が一座すると見えて候。召に參ぜざらんものをば死罪に行はるべしとやらん承りて、參内する所なり。抑、何事の御諚ぞ。」と問ひけれども、信頼

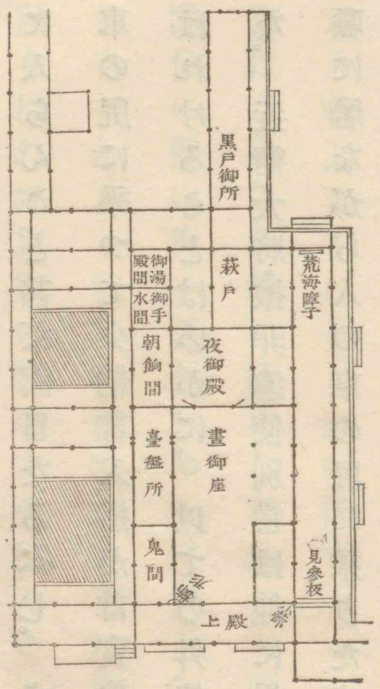
卿ものも宣はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經て光頼卿つい立ちて「悪しう参つて候ひけり。」とて、しづ〳〵と歩みいでられけり。庭上にみち〳〵たる兵ども、これを見奉りて、「あはれ、この殿は大剛の人かな。去んぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に着く人一人もおはしまさゞりつるに、しいだしたることよ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あはれ、この人を大將として合戰せば、いかばかりか頼もしからん。」と申せば、傍なるものゝ「昔頼光・頼信とて源氏の名將おはしましき。その頼光をうち返して光頼と名のり給へば、これも剛にましますぞかし。

十日　除目ありし翌日。

しるしとしるることよ。
全トモガ主殿御ノ剛ノ人ニ
アラズメライヘニ言ヘバ。後ニ「エラ
イコトヲヤツタ」ト言ヒシ
同ジ

頼光・頼信　共に多田源氏滿仲の子。

といへば、また傍より「など、その頼信をうち返して信頼とつき給ふ右衛門督殿は、あれほど臆病にはおはしますぞ。」といへば、「壁に耳、天に口。」といふことあり。おそろし、おそろし。



清涼殿（内裏圖）

聞かじ。」といひながら、皆忍び笑ひに笑ひけり。

光頼卿かやうにふるまひたまへども、急ぎても出でられず、殿上の小蔀の前、見參の板、高らかに踏鳴して立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩戸の邊に弟の別當惟方のおはしけるを招寄せ宣ひけるは、「公卿僉議とて

別當惟方　左兵衛督撿非違使別當藤原惟方。

少納言入道
少納言藤原通憲入道して信西といふ。

神樂岡
洛東吉田神社の邊に在り。

催されつる間、參じたれども、承り定めたる事もなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きはその人皆當時の有識、然るべき人どもなり。その內に入らんこと甚だ面目なるべし。さても先日、右衞門督が車の尻に乘つて、少納言入道が首實檢のために神樂岡へ向はれけることはいかに。以ての外、然るべからざる振舞かな。近衞大將・撿非違使別當は他に異なる重職なり。その職に居ながら人の車の尻に乘りたまふこと、先蹤も未だ聞及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中、首實檢は甚だ穩便ならず。」と宣へば、別當、「それは天氣にて候ひしかば。」とて赤面せられけり。

勸修寺內大臣
藤原高藤。三條右大臣高藤の子定方。

切目
紀伊國日高郡に在り。

光頼卿重ねて「こはいかに、勅諚なればとて、いかで存ずる旨を一議申さゞるべき。我等が曩祖勸修寺內大臣・三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣又十一代。承り行ふことは皆これ德政なり、一度も惡事に從はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴つて讒佞の輩に與せざりしゆゑに、昔より今に至るまで人にさしもどかるゝ程の事はなかりしに、御邊始めて暴惡の臣に語らはれて累家の佳名を失はんこと、口惜しかるべし。大貳淸盛は熊野參詣を遂げずして切目の宿より馳上るなるが、和泉・紀伊・伊賀・伊勢の家人ら待ちうけて大勢にてあなる。信頼卿が語らふ所の兵そこばくならじ。平家の大勢押寄

せて攻めんには、時刻をや回らすべき。もし又火などをかけなば、君もいかでか安穩に渡らせたまふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかにいはんや、君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべし。右衞門督は御邊に大小事を申しあはすとこそ聞ゆれ。相構へて〳〵、隙を伺ひ、玉體恙なくおはします様思案せらるべし。さて主上は何處におはしますぞ。」

「黑戸御所に。」「上皇は。」「一本御書所に。」「內侍所は。」「溫明殿に。」「劍璽は何處に。」「夜の大殿に。」と左衞門督次第に尋ねたまひければ、別當かくぞ答へられける。

又「朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」

と宣へば「それは右衞門督住み候へばその方様の女房などぞかげろひ候ふらん。」と申されければ、光賴卿聞きも敢へず、「世の中は今はかくござんなれ。主上の渡らせたまふべき朝餉には信賴住み、君をば黑戸御所に遷し參らせたり。末代なれども、流石に日月は未だ地に落ちたまはぬものを、天照大神・正八幡宮は王法をいかゞ守りたまひぬるぞ。異國にはかやうの例ありと雖も、我が朝にて未だかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。」とて、のろ〳〵しげに憚る所なく口說きたまへば、惟方は「人もや聞くらん。」と、よにすさまじげにて立たれけれども、且は悲しくて、「我いかなる宿業によつてかゝる世に生れ合ひ憂き事をのみ見聞くら

許由ニ人名。

兵衛佐殿 右兵衛權佐源頼朝。
大庭 大庭三郎景親。
俣野 俣野五郎景久。
岡崎四郎 三浦大介義明の弟。

ん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。」とて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信頼の座上に着かせられし時はさしもゆゝしく見えたまひしが、君の御事をかなしみて、うち萎れてぞ出でたまひける。（平治物語）

一三　佐那田餘一　その一

兵衛佐殿仰に、「武藏・相模に聞ゆる者どもは皆ありと覺ゆ。中にも大庭・俣野・兄弟先陣と見えたり。此等に誰をか組ますべき。」と宣へば、岡崎四郎義實申しけるは、「弓矢を取つて戰場に出づる程の者、敵一人に組まぬ者やは侍るべき。親の

所労ニ病気。
等倫 ともがら。やから。

義忠 佐那田餘一義忠。岡崎四郎義實の子。

錦ニ織道。
妻黒ノ箭 上部ノ端ノ黒キ鷲ノ羽ニテハヤタル矢。
妻ニ端。

身にて申す事、人の嘲を顧みざるに似たれども、存ずる所を申さゞらんも却て又私あるに似たるべし。義忠は此の間大事の所勞仕つて未だ力つかずや侍らめども、心しぶとき奴にて、弓箭取つては等倫に劣るべからず。其の器に侍り。仰せ含めらるゝ。きか。」と申しければ、やがて義忠を召してけり。

餘一、其の日の裝束には、青地の錦の直垂に、赤絨の肩白の鎧の裾金物打つたるを着て、妻黒の箭負ひ、長覆輪の太刀を佩きけり。折烏帽子を引立て弓を平め、跪きて將軍の前に平伏せり。白葦毛なる馬をぞ引かせたる。其の體あたりを拂つてぞ見えし。

兵衛佐、佐那田に宣ひけるは、「大庭・俣野は名ある奴原なり。今日の軍の先陣仕つて、彼等二人が間に組め、源氏の軍の手合なり、高名せよ。」とぞ宣ひける。 餘一仰を蒙り、畏つて御前を立ち、郎等に文三家安と云ふ者を招き寄せて、義忠が母又子どもが母にも語るべしとて云ひけるは、「一昨日打出でしを最後と思ひ給ふべし。 兵衛佐殿、今度の軍の先陣勤めよと直に仰せたびたれば、多くの人の中に擇ばれたる事、弓矢取る身の面目なり。 されば命を限に戰はんずれば、生きて再び歸る事よもあらじ。 豫て斯くと知り侍らば、何事も申し置くべかりけり。 其の事今は力無し。 我討たれぬと聞き給ひなば、母御前の御歎こそ思ひ殘し奉れ。 縱ひ我死したりとも、世の靜まらん程は、二人の稚き者をば如何ならん野の末山の奥にも隱し置きて、佐殿の世に立ち給うたらん時、先祖なれば岡崎と佐那田とをば申し賜はりて、兄弟に知らせてたび候へ。 さては女房も子供が後見しておはしませ。 佛に花香進らせて後の世弔ひ給へ。 父岡崎殿も佐殿の御供なれば、軍の習生死を知らず、女性は何事か有るべきなれば、斯く申置くなり。」と慥に云ひ傳ふべし。 又汝も稚き者ども不便に育て、世にあらば憑め、世になくは憫みて義忠が形見とも思へ。」など云ひければ、文三申しけるは、「殿の二歳の時より、家安親代となつて、夜は胸にかゝへ奉つて夜もすがら勞り、晝は肩にのせ日ねもすに育み奉る。 早く成人し

岡崎・佐那田 共に相模國中郡にあり。

給うて、人に勝れ給はん事を願ひき。五六歳になり給ひしかば、竹の小弓に小竹刈の矢、的草鹿、兎こそ射れ角こそ射れ、馬に乘つては兎こそ馳すれ角こそ馳すれと教へ育て奉りぬ。殿は今年二十五、家安五十七に罷成る。若き人だに主命とて先陣を蒐けて死なんと宣ふ。殿を見捨てゝ、家安が生殘りては何かせん。又人の言はん事こそ恥しけれ。佐那田餘一の最期には恥ある郎等身に副はず。文三家安が如何程命を生きんとてか最期の軍に主を捨てゝ逃げたりけん。」と申さん事も口惜し。死なば一所の討死なり。左樣の事をば誰にも仰せられよかし。」とて三郎丸といふ童を招き寄せ、申含めて遣はしけり。

三浦介義明　相模の名族。源頼朝の功臣。三浦郡衣笠城に戰死す。年八十九。

餘一既に打出でければ、佐殿は「義忠が裝束毛早に見ゆ、着替へよかし。」と宣へば、餘一は「弓矢取る身の晴振舞軍場に過ぎたる事候まじ、尤も願ふ所に侍り。」とて、十五騎の勢を相具して進み出でて申しけるは、「源氏世を取り給ふべき軍の先陣承つて、蒐出でたるを誰とか思ふ。音にも聞くらん、目にも見よ、三浦介義明の弟に、本は三浦惡四郎、今は岡崎四郎義實、其の嫡子に佐那田餘一義忠、生年二十五。我と思はん人々は組めや〳〵。」とて叫んで蒐く。弓手は海、馬手は山、暗さは暗し、雨は射に射て降る、道は狹し、馬に任せてぞかけ行きける。

平家方より「餘一は善き敵ぞ、餘すな。」とて進む者共には、大庭

三郎景親・俣野五郎景久・長尾新五・新六・八木下五郎・漢楊五郎・荻野五郎・曾我太郎・原宗四郎・澁谷莊司・瀧口三郎・稻毛三郎・久下權頭・淺間三郎・廣瀨太郎・岡部六彌太・同次郎・熊谷次郎等を先として究竟の兵七十三騎、佐那田一人に組まんとて我先に我先にと逸れども、暗さは暗し、道は狹し、馬次第にぞ打つたりける。

二十三日。治承四年八月二十三日。

相構へ　心ニ待チ受ケンコト。カナラズ

落合フ　同ジ処ニ出合フコト。

一四　佐那田餘一　その二

二十三日の黃昏時のことなれば、敵も味方も見え分かず。餘一は文三を呼んで、「家安慥に聞け、我は相構へて大庭・俣野が間に組まんと思ふなり。組む程ならば急ぎ落合ひて敵の首を取れ。此の間の勞りに力無く覺ゆれば、豫て云ふぞ。」と云ふ。文三「誰もさこそ存じ候へ。殿の大庭に組み給はば家安は俣野、我大庭に組み候はゞ殿は俣野に組み給へ。」とて進む處に、岡部彌次郎、餘一に組まんと志して、鹿毛なる馬に乘つて馳來る。餘一は岡部とは思ひ寄らず、大庭か俣野かと思ひ、馳寄りて兜の天邊に手を打入れて鞍の前輪に引付けて頸を搔き、取上げて雲透に見れば、思ふ敵にあらずして岡部彌次郎なり。「あな無慚や、鹿待つ處の狸とは此の事にや。何しに來つて義忠に打たるらん。」とて首をば谷へぞ拋入れける。

餘一が乘つたる馬は、白葦毛の太く逞しきが七寸に餘りて、

此間ノ勞　先ノ日ノ大痛

黃昏　誰ノ彼ト

拂曉　カハタレ

黎明　彼ハ誰

鹿毛ニ茶褐色ノ毛アリ　鬣四股ノ処

イウスン　一寸、二寸、三寸　四寸　五寸　六寸

ハツスン　八寸　九寸　十寸

七寸　四足七寸ノコト。馬ハ四足ヲ普通トシコレヨリ上ス／スト謂フ。

鼻の先瓠の花の如く白かりければ、名をば夕顔と云ふ東國一の強馬なり。もと三浦介が許にありけるが、餘に強くて輒く乘る者無かりけるを、岡崎所望して乘りけるが、其も進退し煩ひたりけるに餘一ばかりぞ乘從へたりける。されども岡崎持和げて三浦へ返したれば、元の栖處へ歸つたりとて都返りと名づけたり。佐那田、折節馬無くて又乞返したれば、古巣へ歸つたりとて鶯とも呼びけり。元來強き馬なりけれども、己が力を憑みつゝ、出雲轡の大きなるに手綱二筋縒合せてぞ乘つたりける。岡部彌次郎が首切りける時、鎧武者の身の落つるに驚きて、つと出でて走り行く。さる者ぞと心得て、引留めんとしけれども、此の馬の

水付 水付ト轡ノ手綱ノ端ヲ長クスル

癖として、口をば主に打ちくれて胸にて走る馬なりけり。猶留めんと引く程に手綱三つに切れければ、左右の水付執へたり。左右の水付引捩ぎて、心の儘に引きて行く。大庭三郎は弟の俣野五郎に「構へて餘一に組み給へ。景親も目にかゝらば組まんずるぞ。」と云ふ。俣野は「餘に暗くて敵も味方も見えわかず、餘一も何處やらん。」と云へば、餘一が鎧は裾金物の殊にきらめきて、馬の毛も白かりき。白き幌を懸けたりつれば、著しかりつるなり。」と教ふ。俣野馳出でぬ。餘一馬に引かれて近づきたり。俣野敵の寄すると思ひければ、「佐那田餘一義忠と名乘りつるは落ちぬるか。」と呼びけり。無下に近かりければ、「義忠此處にあり。問ふは誰

そ。」「俣野五郎景久。」と名乗るや遅き、押並べて馬の間へ落重る。上に成り、下に成り、駢返し持返し、山の岨を下りに大道まで四段許ぞ轉びたる。今一返しも轉びなば互に海へは入りなまし。

俣野は大力と聞くに、如何したりけん下に推附けられてうつぶしに臥し、頭は下に、足は上に、起きん〳〵としけれども力無かりける。餘一は上にひたと乗り得て、「義忠敵に組みたり、落重れ〳〵。」と呼びけれども、家安を始めとして郎等ども押隔てられて續く者なし。俣野今は叶はじと思ひて、「景久、佐那田に組みたり。續けや〳〵。」と呼びけるに、長尾新五聲につきて落合ひて、「上や敵、下や敵。」と問ふ。餘一は上に乗

佐那田餘一組打の遺跡

りながら、「斯く宣ふは長尾殿か。上ぞ景久、下ぞ餘一、過し給ふな。」と云ふ。俣野下にて「上ぞ餘一、下ぞ景久、過すな。」と云ふ。頭は一所にあり、暗さは暗し、聲は息突きて分明に聞分かず。上よ下よと論じければ、思ひわびてぞ立つたりける。

俣野「あな不覺の殿や、聲にても聞き知りなん。鎧の毛を

胡籙 ヤナグヒ 箭を盛りて肩に負ふ具。

も探り給へかし。」と云ふ。長尾實にと思ひて鎧の毛をぞ探りける。餘一顯れぬと思ひて、右の足を揚げて長尾をむずと蹈む。蹈まれて下りに弓長三杖ばかりとゞ走りて倒れにけり。其の間に餘一刀を拔いて俣野が首を搔く。搔けども搔けども切れず、刺せども〳〵通らず。餘一刀を持揚げて雲透に見れば、鞘卷の栗形缺けて、鞘ながら拔けたりけり。鞘尻くはへて拔かん〳〵としけれども、運の極の悲しさは、岡部彌次郎が首切りたりける刀を拭はず鞘に差したれば、血詰りして拔けざりけり。長尾新五が弟に新六落合ひて、餘一が胡籙の間にひたと乘得て、兜の天邊を引仰けて頭を搔く。無慚と云ふもおろかなり。俣野を引起して、い

山路愛山。名は彌吉。評論家。大正六年歿す年五十四。神護景雲。稱德天皇。

かに手や負ひたる。」と問へば、「首こそ重く覺ゆれ。」と云ふ。頸を探ればぬれ〳〵とあり。手負うたるにこそとて餘一が刀を見れば、鞘尻一寸ばかり碎けたり。強く刺したりと覺えたり。其の後俣野は軍はせず、「佐那田餘一は、俣野五郎止めたり。」と叫びければ、源氏方には惜みけり、平家方には之を悅びけり。（源平盛衰記）

一五　武士道

山路愛山

神護景雲三年、朝廷警衞の爲、東人を召させ給ひし時の詔に、「東人は、常に額に箭は立つとも、背には立てじ。」といひて、君を一心に護るものぞ。」とあり。東國は蝦夷と境を接して、人種

の生存競爭劇しく、戰爭も多かりしゆゑ、自ら健氣なる風を養成したるならん。蝦夷の反亂聞えずなりし後も、天慶以來幾度か干戈動き、大名・小名の私鬪も亦少からず、人氣自ら上國に殊なり。かくて武士道もこの間に成長したり。

武士道とはいかなるものぞや。一定の釋義を下すはむづかしきことなれども、まづは武士の間に行はれたる面目律ともいふべきものなり。されば武士道にて第一に禁句とする所は、臆病といふ事なり。賴朝は石橋山の厄難の時、日頃髻の中に隱しおきたる觀音の像を取出し、「我が首若し大庭等の手に渡らん時、髻中に此の本尊のあるを見ば源氏の大將の所爲に似ずとて嘲らるべし。それが口惜しければ

我が首 吾妻鏡に見ゆ。

斯くは取出し奉るものなり。」と云へり。崇德上皇、爲義を白河殿に召させたまひし時、爲義、昨夜の凶夢を陳べて、御味方たるべき仰を辭退せんとしたるに、使の殿上人「武將の身として、夢見・物忌などは餘に後れたる沙汰なり。」といはれしかば、爲義「實にも。」とて參殿に及びたり。

宗旨も信仰も、武士に取りては日常の事なり。一旦非常に臨んでは唯何事も惑はず突進するが武士道の極意なり。されば保元の亂に、重盛は「勅命を蒙つて罷向ひたるものが、敵陣強しとて引返すべき樣やある。」といきまき、平治の亂に、義朝は義平の敗軍を見て、「義平が河より西へ引きつるは、家の疵と覺ゆるぞ。今は何をか期すべき。討死せんのみ。」と

武將の身 藤原敎長の語。保元物語に見ゆ。

勅命 保元物語に見ゆ。

義平 平治物語に見ゆ。

云ひて、敵陣に馳突したり。臆病は弓矢の疵となるべきものなれば、寧ろ死すとも卑怯の振舞すべからずとは、武士道の第一義にして、神護景雲の詔に、「額に箭は立つとも、背には立てじ。」とあるものと同意なり。如何なる場合にも、逃げたりなど云はれんは口惜し。「侍程の者が一度申さじと思切りし事を、縱ひ拷問せられたればとて申すべき樣なし。」と云ふが如く、何事も思切つて惡びれぬを武士の魂とす。

次に其の頃の武士道にて、宗と重んじたるは志の專一なることなり。尤も、「大名は草の靡き。」と云ふ諺は其の頃よりあり。強さうなる方に加擔して、所領安堵を求むるは一般の習なりしかども、さりとて輿論は、かく意氣地なきを善しと

侍程の者
平家物語に見ゆ。長谷部信連の語。

大名は
承久軍物語に見ゆ。

せしには非ず。主從の義を重んじ、忠を主人の家に盡すを以て、眞の武士の面目とし、殊に主家の盛衰に從つて、向背の態度を變ずるを以て醜事としたり。されば源氏に從ふ武士は、「源氏は二人の主とることなければ、宣旨なりとて、えこそ內裏へは參るまじけれ。」と云ひしものもあり。「源氏の習、心がはりやあるべき。」とて肩を怒らしゝものもあり。「凡そ武士には二心を恥とす。殊に源氏の習は左樣に候。」と力みしものもあり。平家に從ふ武士も、忠盛の家の子には、「主若し辱しめられたらんにはえこそ遠慮はすまじけれ。必ず殿上迄も斬り入らん。」と決心したるものもあり。平宗淸は賴朝の恩人にて、賴朝より「關東に來らば善く扶持せん。」と言

源氏は
源親治の語。保元物語に見ゆ。

源氏の習
源義朝の語。平治物語に見ゆ。

凡そ武士
源義平の語。平治物語に見ゆ。

主君
平家貞の語。平家物語に見ゆ。

關東
吾妻鏡に見ゆ。

送りたれども、「平家零落の後、賴朝に參向する一條、尤も恥ぢ存じ候。」と云ひ、直ちに屋島の內府に參り、運命を主家と共にしたり。齋藤別當實盛は、「吉についてあなたへ參り、こなたへ參らんは見苦し。今は源氏の世盛となりたりとも我は平家の味方となりて討死せん。」とて、黑く染めたる白髮首を木曾義仲の士に取らせたり。

吉について　平家物語に見ゆ。

斯く臆病を惡み、主人に忠を盡すを宗としたる武士道が、其の結果として死生を度外に置きたるは當然なり。東國武士が平家を西海に討ちし時、「病身ながら天下の重事なり。坐視すべきに非ず。とても死ぬる身ならば戰場に死なん。」とて出陣したる者のことは、吾妻鏡にも見えたり。「事あらば眞先かけて命を主君に奉らん。弓矢執る身は、死すべき處を遁れぬれば、中々最期の恥あるなり。」とて、腹搔切つて死したるは其の頃の武士の習なれば、義朝も、「合戰の場に罷出でて何ぞ生命を存ぜん。」といへり。されば賴朝が十四歲にして父擊たると聞きながら、自害をもせず、池禪尼にすがりてかひなき生命を助かりしを、時の人は善くも言はざりしなり。

病身ながら　加藤景廉の語。

合戰の場　保元物語に見ゆ。

此の外、其の頃の武士道にて殊に著しき一箇條は、人々互に功名を競ひたる事なり。爲朝が白河殿にて、「我は親にも連るまじ、兄にも具すまじ、功名不覺も紛れぬ樣に唯一人いかにも強からん方へ差向け給へ。敵たとひ千騎もあり、萬騎

我は　保元物語に見ゆ。

もありとも、一方は射拂はんずるなり。」と廣言したるは、最も善く武士の氣習を言ひあらはしたるものにて、佐々木・梶原の宇治川先陣なども其の一例なり。

但し弓矢の道と云ひ、武士の道と云ふもの、畢竟自然に生じたる武士の面目律にて、多くは無意識の間に發達したるものなれば、此處までが武士道、此處までが武士道に非ずと、明かに區別を立て得べきものに非ず。さりとて其の面目律の制裁は、頼朝時代にても中々嚴重にして、武士道に外れたるものは武士の間には生きて居られぬ程なりき。例へば平治の亂に、源氏の士ども藤原信頼を見限り、「此の殿は、人に頬を打たれて、返事をだにし給はねば、侍の主には叶ひ難し。」

此の殿は　平治物語に見ゆ。

と云ひしが如く、大將若し武士道の心得なければ士卒附かず、侍若し名を惜まず卑怯の振舞あれば、武士の間に齒せられざりき。而して此の武士道は東國に盛にして、都には流行せず。都は柔弱者の寄合なりし故、天下の勢遂に上輕く、下重くなりて、日本未曾有の大改革とはなりたるなり。

さりながら東國の武士が天下の主人となりたるは、獨り武士道の盛なりしが爲には非ず。保元以來、都に兵事多く、京洛の客往々四方に散じ、天下經營の知識に東國の武力を合併したるが故なり。近き世の薩摩の事も之に似たり。薩藩は武道の盛なる處にして、百二都城の健兒は勇氣に於て天下無比なりしかども、それだけにては天下に功を立つる

不養虎今不養敵、亦是九州西一涯、七百年來日知處、百二都城皆吾倚、反側海南多尺劍、躊躇天下之寸鞋、吾屠所人若欲知、長住慶兒城步行

こともならざりしに、島津齊彬の祖父重豪、隱居して榮翁と稱せし人、薩摩の、邊土にて武士の片意地なることを憂ひ、天下の形勢をも知らしめんとし、勉めて上國の風を移しゝより、薩藩固有の武士氣質と上國の知識とは此に相合して、薩人始めて眼を天下の形勢に開くに至れるなり。東國の強きのみにては、未だ天下を圖り難し。賴朝は北條・三浦・千葉・小山などいふ東國武士の力を假りたると共に、大江廣元・三好康信など云ふ京洛の客を愛し、其の經綸の知識を用ひたるなり。武士道も開化せざれば唯強きのみ。天下の形勢を辨へ知る知識と武士道との二味が調合して、始めて役に立ちしなり。（愛山文集）

一六 狐塚

主「此のあたりの者で御座る。某山田を數多持つて御座る。當年は事の外よう出來て御座る。さりながら此の頃は鹿・猿・貉が出て田を荒します。太郎冠者を呼びいだし、山田の番にやらうと存ずる。やい〳〵太郎冠者在るか。」

太「はあ。御前に居ります。」

主「汝を呼び出す事別の事でない。當年は身共の山田が事の外よう出來た。其につき、此の頃は鹿・猿が田を荒す程に、汝は今夜山田へいて、鳥獸も來たらば、追うて番をせい。」

太「畏まつて御座る。私一人で御座るか。」

主「いや後程は次郎も見舞にやらう程に、先づ行け。」

太「心得ました。」

主「さりながら此の中は狐塚の狐が出てばかすと云ふ程に、ばかされぬ様にして番をせい。」

太「それはこはい事で御座る。もはや參ります。」

主「明日早々歸れ。」

太「はあ。」

主「えい。」

太「扨も〳〵迷惑な事いひつけられた。夜晝使はるゝといふは氣の毒な事ぢや。參る程に是ぢや。先づ是にゐて番を致さう。」

つかはう 遣はさうの寫。

小筒 酒などを入れる筒

主「太郎冠者を山田へ番に遣はして御座る。定めてさびしうしてゐるで御座らう。次郎冠者を見舞につかはうと存ずる。やい〳〵次郎冠者あるか。」

次「是に居ります。」

主「汝は太儀ながら山田へいて、太郎冠者が伽をしてやれ。」

次「畏まつて御座る。」

主「小筒も少し持つて行け。」

次「心得ました。是は扨迷惑なれども、參らずば成るまい。主命ぢや、是非に及ばぬ。是は暗うてどこやら知れる事でない。呼ばはつて見よう。ほうい〳〵太郎冠者やい。どこに居るぞ。」

太「さればこそ狐が出た。あれは次郎冠者が聲ぢや。ようぬらさう。」

似せた。おのればかさるゝ事では無いぞ。先づ眉毛を

次「ほういく。」

太「ほういく。こゝにゐるは。」

次「どこにゐるぞ。」

太「こゝにゐるは。やあ次郎冠者か。」

次「なか〳〵。頼うだ人が言ひ付けられて伽に來たは。」

太「ようこそおりやつたれ。扨も〳〵ようばけた。そのまの次郎冠者ぢや。捕へて縛つてやらう。やい次郎冠者。最前向ふの山から大きな鹿が出たを、身共が追うた

れば、こなたの山へくわら〳〵と逃げたは。」

次「それはでかした。」

太「どつこへ。やる事ではないぞ。」

次「是は何とするぞ。」

太「何とするとは。狐め、ばかさるゝ事ではないぞ。」

次「おれは次郎冠者ぢや。」

太「何の次郎冠者。おのれ縛つて、此の柱にくゝつて置いて。狐殿、よい體の。おのれ今に皮を剝いでくれうぞ。」

主「太郎冠者・次郎冠者を山田へ遣はして御座る。心もとなう御座る。見に參らうと存ずる。ほういく。」

者やい。次郎冠者やい。ほういく。太郎冠

太「是はいかな事。また狐が出をつた。あれは賴うだ人の聲ぢや。是も捕へてやらう。ほういい〳〵。」

主「ほういい〳〵。どこにゐるぞ。」

太「こゝにゐます。」

主「やあ是にゐるか。淋しからうと思うて見舞に來た。次郎冠者を先へ遣したが。」

太「なか〳〵。あれにゐます。これはいかな事。是もようばけた。其のまゝ賴うだ人ぢや。縛つてくれう。がつきめ。おのれだまさるゝ事ではないぞ。」

主「是は何とするぞ。身共ぢや。」

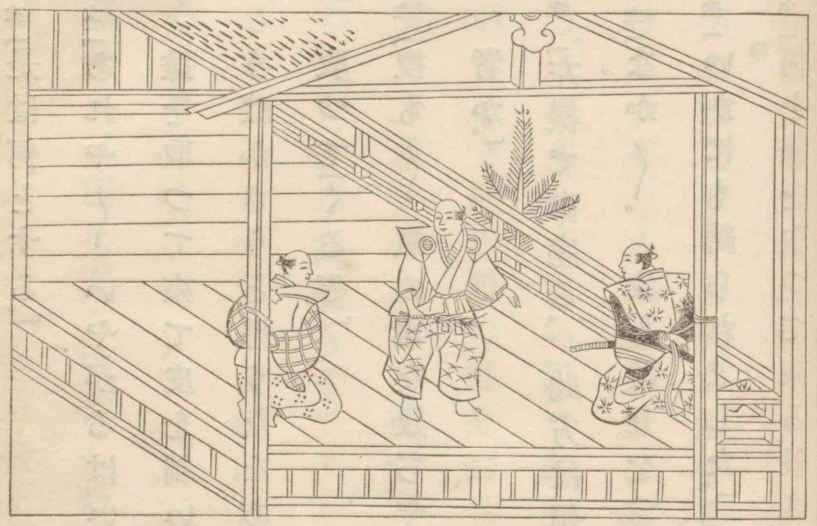
太「おのれもようばけた。先づ縛つて、此の大木にくゝりつけて置いて、致しやうがある。狐は松葉でふすべるといやがるといふ。ふすべてやらう。さあ〳〵尾を出せ。鳴け〳〵。」

主「おのれ太郎冠者め。主を此の様にして。罰當りめ。」

太「何を狐殿いはるゝ。さらば次郎冠者もふすべてやらう。さあ〳〵鳴け〳〵。こん〳〵といへ。」

いかなる事。
如何なるわざや。どうしてあることゝ。
ことゝやとあやしみる語。

がつき 餓鬼の意。



狂言 狐塚

（狂言記 續）

次「是は何とする。」

太「あれや〳〵いやがるは、いやがるは。おのれ二匹ながら鎌を取つて來て、皮を剝いでくれうぞ。待つてをれ。ようばかさうと思うたなあ。唯今殺してくれうぞ。鎌を取つてくるぞ。」

主「扨も〳〵氣の毒な奴ぢや。やあそれに見ゆるは次郎冠者か。」

次「左樣で御座る。此方は賴うだ御方か。」

主「なか〳〵。汝も縛りをつたか。」

次「いかにも縛られました。」

主「何と鎌を取つて來る、殺さうと言ひをつたが、何とそちが

縄はほどかれぬか。」

次「されば、どうやら縄が解けさうに御座る。解けますぞ、解けますぞ。さあ解きました。どれ〳〵、此方も解きませう。扨も〳〵憎い奴で御座る。何とした物で御座らう。」

主「いや〳〵此の體ではそばへよるまい程に、もとの樣にしてゐて、是へ來たらば捕へて、あいつをゆりにあげう。」

次「一段とよう御座らう。」

主「さあ是へよつて元の樣にしてゐよ。」

次「心得ました。」

太「狐めは二匹ながら居るか知らぬ。此の鎌で殺してくれう。さあ今打殺すぞ、打殺すぞ。」

主「それや次郎冠者。」

次「心得ました。」

主「おのれにくいやつの。　次郎冠者足を持て。」

次「心得ました。」

主「さあ、ゆりに上げ、ゆりに上げ。」

太「是は何と、狐ども、するぞ。」

主「狐とはまだ、おのれめは、にくいやつの。縛り居つたが、よいか。是がよいか。是がよいか。」

太「扨は頼うだ人。次郎冠者か。免させられ。まつぴら御ゆるされ。まつぴら御ゆるされ。」

次「どこへ失せる。やるまいぞ。やるまいぞ。」（續狂言記）

一七　能をつかんとする人

兼好法師

能をつかんとする人、「よくせざらん程は、なまじひに人に知られじ。うち〳〵よく習ひ得て、さし出でたらんこそ、いと心にくからめ。」と常に云ふめれど、斯く云ふ人、一藝も習ひ得ること無し。未だ堅固かたほなるより、上手の中に交りて誘り笑はるゝにも恥ぢず、つれなく過ぎてたしなむ人、天性其の骨無けれども、道に泥まず、妄りにせずして、年を送れば、堪能のたしなまざるよりは、遂に上手の位に至り、徳長け、人に許されて、雙無き名を得る事なり。天下の物の上手といへども、始は不堪の聞えもあり、無下の瑕瑾もありき。され

兼好法師　吉田兼好。吉野朝の文學者。正平五年（一三五〇）歿す年六十九。

ども、其の人、道の掟正しく、是を重くして放埒せざれば、世の博士にて萬人の師となる事、諸道變るべからず。（徒然草）

一八　四時のあはれ

兼好法師

物のあはれは　春はたゞ花のひとへにさくばかりもの〻あはれは秋ぞまされる。讀人不知。

折節の遷り變るこそ物ごとにあはれなれ。「物のあはれは秋こそまされ。」と人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いま一きは心も浮立つものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に垣根の草萌え出づる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやうやうけしきだつほどこそあれ、折しも雨風打續きて、心あわたゞしう散り過ぎぬ。青葉になりゆくまで、萬にたゞ心を

のみぞ惱ます。花橘は名にこそ負へれ、（本体へ見ノ名ヲ示ス通）猶梅の匂にぞいにしへの事も、たちかへりこひしう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤の覺束なき樣したるすべて思ひすてがたきことの多し。

花橘は　さ月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする。古今集。

灌佛の頃、祭の頃、「若葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ世のあはれも人の戀しさもまされ。」と人の仰せられしこそげにさるものなれ。五月菖蒲葺く頃、早苗とる頃、水鷄の叩くなど心細からぬかは。六月の頃あやしき家に夕顏の白く見えて蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。棚機祭るこそなまめかしけれ。やう〳〵夜寒になる程、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づく頃、早稲田刈りほすなど、取集

祭　賀茂の葵祭。四月の中の酉の日。

めたる事は秋のみぞ多かる。又野分の朝こそをかしけれ。言續くれば、皆源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じ事また今更に言はじとにもあらず。思しき事言はぬは腹ふくるゝ業なれば、筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやりすつべきものなれば、人の見るべきにあらず。

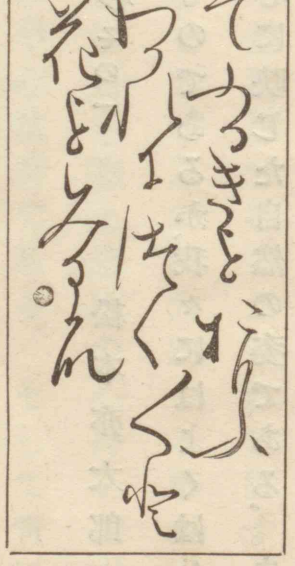
さて、冬枯の景色こそ秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてゝ、人毎にいそぎあへる頃ぞまたなくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の寒けく澄める二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名・荷前の使立つなどぞあはれに

思しき事
おぼしき事いはぬはげにぞはらふくるゝこゝちしける。大鏡。

やむごとなき。公事ども繁く、春のいそぎに取重ねて催しおこなはるゝ様ぞいみじきや。追儺より四方拜に續くこそ面白けれ。つごもりの夜いたう暗きに、松どもともして夜半過ぐるまで人の門叩き走りありきて、何事にかあらん事々しくのゝしりて足を空にまどふが、曉方よりさすがに音なくなりぬるこそ年の名殘も心細けれ。亡き人の來る夜とて魂祭るわざは、此の頃都にはなきを、あづまの方には

追儺
おにやらひとも云ふ。春ツゴモリ。晦日の夜に惡鬼を追ひ拂ふさまなどもあるべし。

筆蹟
花にむかひてふるきをおもふ
春の日のながきわかれにつくづくとなぐさめかねて花を見るかな



泉好法師筆蹟
（前田侯爵藏）

猶する事にてありしこそあはれなりしか。

かくて明け行く空の景色、昨日に變りたりとは見えねど、引替へ珍しき心地ぞする。大路の樣、松立て渡して、華やかに嬉しげなるこそまたあはれなれ。（徒然草）

一九　自然と色彩その一

松本亦太郎

自然其の物は如何なるものであるか、我々にはよくは分らない。我々に分るのは心に映じた自然の姿である。自然は觸覺に映ずる。生來盲聾の女天才ローラー・ブリッヂマンの味つて居つた美妙の自然は唯觸覺に映じた自然の相であつた。自然が聽覺に映ずる時は音響の世界を現出する。

松本亦太郎
心理學者。文學博士。東京帝國大學文科大學教授。慶應元年（一八六五）生。
ローラー・ブリッヂマン
盲啞にして味覺嗅覺も不十分なりし米國婦人。（1829—1889）

が、自然の割合に廣い部分を反映せしむるは視覺であらう。これが色彩の世界となつて我々に意識される。最も美しい、又最も變化の多い世界である。

自然界に現れる色彩は千差萬別であるが、これに對する心持の方から見ると、全色彩を先づ二つに大別する事が出來る。即ち溫暖の心持を生ずる色彩と寒冷の心持を生ずる色彩とである。寒冷色の中心は青である。そして青に近い色は青綠から紺青に至るまで皆凉しい感じを與へる。溫暖色の中心は橙黃であつて、橙黃に近似の色は暗赤色から黃綠に至るまで皆暖かな感じを與へる。

日本や伊太利あたりでは、晴天には大空は青々として眞に

美しい。然るに北歐諸國では、晴れて居る時でも空氣が透明で無く、空は灰色になつて居る。勿論多少の青みはあるが、さえ〴〵とした青色では無い、鉛の様な色をしてゐる。從つて晝でも夜でも天體の光が朦朧としてゐる。北歐の人が伊太利の自然を讃美して止まないのは、彼等は青天白日の美を日常見る事が稀だからである。大空の色は飽和の度の強い青では無い、濃い青を日光を以て薄くしたのだ。あの淡青即ち空色は靜かな色だが、喜悅の色である。最も濃い青即ち紺青は深い海の表面に於て見られる。きはめて濃厚な紺青は深さ一萬七八千呎もある大西洋の水面で見られる。紺青の水より雪白の波の花の咲くのも不

思議だが、その花が忽ち紺青に染められるのも面白い。雪白と紺青との爭は限もなく繰返されて二つの色彩が目覺しく活躍する。紺青は如何にも美しい色だが、沈鬱にして一種の凄みがある。希臘の内海や伊太利の沿岸の如く海が淺くなると、紺青は稍淡くなつて瑠璃の寶玉を液化した様に爽快になり、更に瑞西の山間ルツェルンの湖水などになると、藍青は綠を帶びて、恰も翡翠の玉を水に化したるが如く、色は靜かだが沈鬱の趣は淡くなる。ライン川の上流などになると、綠色は益〻勝つて青色を壓する。概して水は深きより淺きに移るに從ひ、紺青より青を經て綠に移るのである。地球の表面の大部分をなして居る水の色が青であ

り、天空の色が青であるのだから、天地の色は青が主調になつてゐると謂はなければならない。空の見える處、水の動く處、人間の心を沈靜させる働が斷えず行はれて居る。花の中にもあやめ・紫陽花・野生の朝顏などの色は何れも凉しく靜かに人の心を休息させる色である。

青と正反對なのは橙黃色である。是は暖い色であると共に人の心を大いに發揚させる。太陽から發射する光は最も光輝ある橙黃色である。秋の夕陽が西山に沒せんとする際の空の色は太陽から出る黃金色の本性を最もよく發揮する。例へば東海道に於ける富士山、京都に於ける愛宕山、それの後に日の入らんとする時の空は全く金箔の色と

化し、山岳の碧色と映帶して、一段の見榮えがある。私の心に最も強い印象を殘したのは紅海の上から眺めたシナイ山の夕陽の景色であつた。絕頂から黃金の光を浴びて居るシナイ山の中腹に懸つた雲は黃金の神火が燃える如くに見えて、莊嚴云はん方なかつた。炎の中にエホバの聲が聞えたとか、暗中に火の柱が立つてイスラエルの民の沙漠旅行を先導したとか云ふ樣な猶太の神話はあゝ云ふ景色から涌出したのではあるまいか。

太陽の光が月や星に反映すると、熱烈な黃金色が幾分和かく冷やかな色になる。地平を出る時の月は空氣の汚濁せるため銅色を帶びて居るが、段々高くなつて澄渡れる空氣

を透して月を見ると、空氣の青色が加つて來るために月は黄金に銀を混じたるが如く、稍〻蒼白になり、冷靜の趣を生じ、人をして沈思せしめる。天體天象の色としての黄金色は其の發顯の規模が大きくて人の心を躍動せしめるのであるが、小規模に於ては地上の花の色となつて人を樂しませる。冬の蜜柑畑、春の菜種畑は何人が眺めても怡悅を感ずる。連翹・山吹・月見草・黄菊・水仙の類、四季の花として何れも優しい懷かしい趣がある。南瓜・胡瓜の花にも棄てがたい野趣がある。

二〇　自然と色彩その二

松本亦太郎

地上に於ける非情の生物の有する特色であつて、天には無い色が綠色とその附近の色である。この色は紫紺と橙黄との中間に位する。いつまで眺めて居ても飽きない色である。嫩草や若葉は大抵帶綠黄色で始るが、日を經る儘に綠色となり、終に暗綠色となる。若葉の萌え出るときは誠に美しい、氣が舒び〳〵する。五月初の若葉は四月初の花よりも遙に趣が深い。東台・東山・宇治・嵐峽の新綠を訪うて樂しむ人の割合に少いのは、花見客の多數が自然の風色を樂しむ心を有つて居らぬ事を示して居る。佛獨あたりでは花に對しては餘り騷がないが、森林の色を樂しむ事は隨分盛である。英米では面積の廣大なる芝生を造ることが

俗了 俗ニシテ了ル

實に巧である。共に其の國民が綠色趣味に富んで居る事をよく示して居る。日本の三都の中で市街内に樹木の最も多いのは東京である。殊に高臺の光景から云へば東京は樹木の都と謂つても可い。京都は周圍に美麗なる山色はあるが、御苑を除いては市中には樹木が乏しい。大阪は市の内外共に樹木は甚だ少い。工業都市が自然を隔絶するは止むを得ないが、自然から餘り隔離すると人の心は俗了する。大都會に樹木鬱蒼たる大公園を作るのは、都人士の心身を健全ならしむる上に必要な事である。

暖い色と寒い色との中間に在る點に於ては綠と同じであるが、色の性質に於て正反對なのは紫である。紫にも紺青に近いものと赤に近いものとある。牡丹・芍藥・躑躅の花は赤に近い紫で、杜若・菖蒲・菫・藤の花などは紺青に近い紫である。木蓮の花は丁度桔梗と赤との中間にある。人間に培養された朝顏の花は差別が甚だ多いが、大抵赤と青との中間に變化して、紫系のものが最も多數を占める。總じて紫系の花は人を興奮させると同時に人を沈靜させる。派手なるがごとく、おとなしきがごとく、兩樣の趣が具はつて居るため人を惱ます色である。薄紫になると優美の情趣が加つて來る。紫色に光輝が加はると莊嚴な色になる。ゲーテが「神がすべての人に審判を下す世界の末日の色は必ずや紫色であらう」と言つたのは其の莊嚴の趣から考へた

ものであらう。ヴィクトリア女皇は紫を好み、女皇の大葬の日は倫敦市中紫の幕で張り詰めた。紫は王者の色と謂ふことも出來る。

諸色の中で人の心を最も強く興奮させるのは赤い色である。綠は非情の生物が外面に發顯する色であるが、赤は有情の生物の身體内に流動する重なる色である。併し赤は又天象の色として或は植物の色として頗る著しい色である。火山が爆發して天に火の柱を立てる時などは赤も隨分凄じいものになる。何人も知つて居るのは夕やけの現象である。

通例地上に於て眺めることの出來る赤い風色は秋の紅葉である。碓氷峠・日光山あたりの紅葉は滿山燃ゆるが如く、京都附近の紅葉は色が冴えてゐるが箱庭的の風景が多い。或年の十月の初にロキー山を通過した。ロッキー山脈にはそれこそ實に大きい山が突兀として天に聳え、雪を戴いて氷河などが流れて居る、裾の山々溪々の木の葉は眼路の及ぶかぎり紅に染められ、汽車はいくら走つても容易に紅葉の洞を出ぬけることが出來なかつた。

花として咲き出づる紅は淡紅のものが多い。深紅は濃厚に過ぎて之を廣い面積に擴げると比較的味が乏しくなるが、淡紅となると喜悅の情があつて味が深くなる。櫻の花でも桃の花でもれんげの花でも櫻草でも、民衆の狂喜する

のは皆淡紅である。尤も小さい花なら深紅でもよい。罌粟の花とかダリヤの花とか云ふ樣なものは美しい。牡丹なども一二輪深紅で咲いて居るのは見榮えがある。

自然界に現れる色彩は明暗の兩極にすゝむに從ひ、漸次に色を失ひ、一方に於ては白色となり、他方に於ては黑色となり、全く無色となる。白は喜悅淸淨の色である、白雲・白雪程淸らかなものはない。白梅・白蓮・卯の花・白躑躅・白菊・白牡丹等何れも喜悅淸淨の象徵である。蕎麥・大根の花畑なども棄て難い風情がある。如何なる色でも白が混じて薄い色になると喜悅の相を呈する事になる。自然界には色彩の競爭がある。併し如何なる色でも悉く他の色を壓迫禁止して全勝を占める事は出來ない。唯一つ色界を絕滅する力を有つて居る色がある。それは暗黑色である。暗黑は神祕の色であつて、全視覺世界を併呑する怪物である。

自然界は色彩の無盡藏である、我々人間の精神生活は此の色彩のために極めて興味深く着色されて居る。而して此の自然の色彩を基礎として人間は美術及び工藝上の色彩を生ぜしめ、之によつて更に色彩の世界を豐富にする。若し自然界及び人間界より色彩を奪ひ去つたならば、人生は餘程落寞たるものになるであらう。（渡り鳥日記）

二一　賀茂眞淵

伴　蒿　蹊

春滿。 山城伏見稲荷山の祠官。國學者。元文元年（一七三六）卒す年六十九。

在滿。 春滿の甥。國學者。寶暦元年（一七五一）卒す年四十六。

大人。 春滿を指す。

眞淵は姓賀茂、縣主、岡部衞士と名のる。遠州濱松の人。春滿に從ひ、家僕のごとくして京都に學ぶこと年あり。學成りて江戸に下り、大いに古學を唱ふ。春滿は萬葉の解に功ありといへども、歌はその風をよまず。在滿は「萬葉の比は文華いまだ開けず、歌の盛は新古今集の時なり」といへり。眞淵に及びて、はじめて萬葉の風をよみうつし、文章も亦古言をもて綴り、一家を成し、世の耳目を驚かす。從ひ學ぶもの多し。

その說に、「契沖は新墾しつれど、未だよく植ゑつくさぬ程に過ぎしこそ惜しけれ。大人は歌のみかは、舊りぬるちゝの書どもをあらすきかへしゝいたづきのかひ、さはなれども、

南郭服部氏 名は元喬。徂徠の門人。古文辭家。寶暦九年（一七五九）歿す年七十七。

まだ刈りをさめ果てざるに病に臥しつ」などいひて、おのれ是がなりはひを遂ぐるよしなり。實に古を發揮して後生を誘ふ功少なからず。

賀茂眞淵像（竹柏園藏）

其の證をいはゞ、或時南郭服部氏を訪ひて物語らふついで、「唐詩の風韻衰へて六朝に及ばぬは『汾上驚秋』の詩にて知りぬ」といふ。南郭「いかに」と問ふ。「されば」と、「北風吹白雲、萬里度河汾」といへる起承の句、誠に羇旅の秋情いはん方なきに、「心緒逢搖落、秋聲不可聞」の轉合の句、上の意を注

せしに、氣格の落ちたるを覺ゆ。吾が邦の歌も、後世のさま劣り行くは、唯此の如し。」といへば、南郭も大いに感服せりとなり。又山邊赤人の歌、

田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ、富士の高嶺に雪はふりける。

といふを注して、「田子の浦より磯傳ひに薩埵の山陰を打出でて見れば、富士の高嶺の雪眞白に天外に秀でたるを、こはいかでと見て感じたるさまなり。何ともいはで有りのまに述べたるに、其の時、その地、其の情、おのづから備ること、古の妙なるものなり。赤人は短歌の神なること此の一首にても知らる。」と解きて、細註に『悠然見南山』といふも相似たりといふ人侍れど、かれは、その處にての事、是はふと山陰より立出でて見出したるなれば、其の義異なり。又悠然としてとは、みづからの心を注せるに似たれば、猶作れるものなり。此の歌は唯有りのまゝなるが似る者なきなり。」など論ずる所、深くその旨を得たりといふべし。

されども何につけても大成を任とせる故に物事に疑を闕かず、強解もまたまゝ見ゆるにや。又唐國のことを仇のごといひて、孔子をさへ議することあり。是は世の儒士自ら夷と稱し、此の國の非を數へて唐土に生れぬを憾むるごときを憤れるなるべし。是固よりその罪いふべからず。皇神の御惠に漏れたる國の蠹なり、されどもまた眞淵も甚

だしといふべし。譬へば病を藥せんに、是になきものは彼處に求めんに何の忌むことかあらん。唯病の平らぐをせんとすべきのみ。こは心狹きが故か。

生涯國學を任として江戸に終る。歳七十有餘とぞ。その詠み出でたる歌、門人宇萬伎が記しおけるうち、少し書き出す。

春の日山を望むといふ題を

見渡せば天のかぐ山うねび山
あらそひたてる春霞かも。

その住居を縣居と名づけゝる處にて、長月十三夜によめる。

歳七十有餘 明和六年(一七六九)歳す年七十三。

宇萬伎。 加藤五郎左衛門美樹。國學者。安永六年(一七七七)歳す年五十三。或はいふ五十七

長月＝陰暦九月。

秋の夜のほがら〳〵と天の原
照る月影に雁鳴きわたる。

神無月ばかり嵐を
科野なる須賀の荒野に飛ぶ鷲の
翼もたわに吹く嵐かな。

又若きほどの歌とて、別に朱をもて宇萬伎が書添へし中、

鳴子ひく門田の稻のほどもなく
立ちてはかへるむら雀かな。

宇萬伎いふ「これら姿も詞もよろしきものから、こゝろかしこきに過ぎていと後の世のさましたり。中

たわ＝撓。

ほど＝程。間。節。ふし。

よろしきもの＝よろしこはあれど。

こゝろ＝意味。

中ごろ＝中年ノコロ。

さだには詞も姿も唯あがれる世のさまにのみ詠みうつされし多かりしを、やゝ老に至りてかゝるさまに（前の歌どもをさす）のみ詠み出でられしはいと高しとも高し。世に聞き知る人はありや、なしや。」

蒿蹊いふ、「此の老の後のはおのれも聞き知る人の數に入るべし。又若きほどのは後の世のさまなれば、歌主の後の意にはかなはざらめど、其の才のたけたるを覺ゆ。かゝればこそ一家の學をも唱へ出しけれ。」（近世畸人傳）

三　春の心

賀茂真淵

うら〳〵とのどけき春の心より
にほひいでたる山櫻花

加藤宇萬伎

その昔おち死にをした武士のかばねに草が生えて秋風が寒く吹き渡る桔梗ヶ原のものさびさよ。

ものゝふの草むすかばね年ふりて
秋風さむしきちかうの原

小澤蘆庵

月も花もぼんやりとしてかすんでゐる春のおぼろ夜にひとり大堰川の浪の音ばかり鮮かに聞えてゐる。

大堰川月と花とのおぼろ夜ふ
ひとり霞まぬ浪のおとかな

加藤千蔭

桔梗が原　信濃國東筑摩郡洗馬附近の原。武田信玄と小笠原長時との會戰せし處。

小澤蘆庵　京都の歌人。享和元年（一八〇一）歿す年七十九。

加藤千蔭　江戸の國學者。文化五年（一八〇八）歿す年七十四。

村田春海
江戸の國學者。文化八年（一八一一）歿す年六十六。

木下幸文
京都の歌人。文政五年（一八二二）歿す年四十三。

香川景樹
京都の歌人、天保十四年（一八四三）歿す、年七十四。

渕田川みのきてくだす筏師に　村田春海

かすむあしたの雨をそしき

富士の峯は白雲のあの辺ふらんと心に其位置をおしはかりて仮すらこの辺を見つつあれば何ぞはからんそこの位置なる富士の山麓は雖りえたり。

心あてに見し白雲はふもとにて　木下幸文

おもはぬ空にはる〳〵富士のね

あれ松原越に鐘が聞える多分之が花の咲き乱れて居る事ひあらふ。ひれそこの事を尋ねて行て花見をしようと。

行きて見むらわれ花ある寺なるむ　香川景樹

松原ごしに鐘きこゆなり（詠歎助動詞）

佐保川原の小石に映りて咲く白菊の美さん称りたる

いつくより駒うちいまむ佐保川の　香川景樹

さゞれにうつるしら菊の花

龍田川無理に渕れば紅葉かちらん。

雲かゝるわたのみなかに荒潮を　加納諸平

雨とふらせて　鯨うかべり

賤の男が芥くゆらす山畑の　中島廣足

冬木のうれにひたき鳴くなり

はねならす蜂あたゝかにみなさゝる　橘曙覽

窓をうづめてさゝうひかな

芥　カラ　アクタ　カラシ

綿帽子と渡る海

少めば惜し　少まねばゆかず　かもめ　しろし　白かしろし　白梅花

加納諸平
和歌山の歌人。安政四年（一八五七）歿す年五十二。

中島廣足
熊本の國學者。元治元年（一八六四）歿す年七十三。

橘曙覽
福井の歌人。明治元年歿す年五十七。

うれ〻梢

さうひ〻薔薇

本居宣長
國學者。通稱中衛。鈴屋と號す。享和元年（一八〇一）歿す年七十二。

二三　師の説になづまず

本居宣長

おのれ古典をとくに、師の説とたがへること多く、師の説のわろき事あるをば、わきまへいふこともおほかるを、いとあるまじきことゝ思ふ人おほかめれど、これすなはちわが師の心にて、つねにをしへられしは、「後によき考の出できたらんには、かならずしも師の説に違ふとて、なはゞかりそ。」とな、教へられし。こはいとたふときをしへにて、わが師の、よにすぐれ給へる一つなり。大かた古をかむがふる事、さらにひとり二人の力もて、ことゞくあきらめつくすべくもあらず。又よき人の説ならんからに、多くの中には、誤もなどかなからん。必ずわろき事もまじらでは、えあらず。そのおのが心には、今はいにしへのこゝろ、ことゞく明らかなり、これをおきては、あるべくもあらずと、思ひ定めたることも、思の外に、又人のことなるよき考もいでくるわざなり。あまたの手を經るまに〳〵、さきざきの考のうへを、なほよく考へきはむるからに、つぎ〳〵にくはしくなりもてゆくわざなれば、師の説なりとて、かならずなづみ守るべきにもあらず。よきあしきをいはず、ひた

本居宣長（本居清造藏）

ぶるにふるきをまもるは、學問の道には、いふかひなきわざなり。又おのが師などのわろきことをいひあらはすは、いとも畏くはあれど、それもいはざれば、世の學者その說に惑ひて、長くよきをしる期なし。師の說なりとして、わろきを知りながらいはず、つゝみかくしてよきさまにつくろひをらんは、たゞ師をのみ貴みて、道をば思はざるなり。

宣長は道をたふとみ古を思ひて、ひたぶるに道の明らかならん事を思ひ、古の意のあきらかならんことをむねと思ふが故に、わたくしに師をたふとむことわりのかけんことをば、えしもかへりみざることあるを、なほわろしとそしらん人はそしりてよ。そはせんかたなし。われは人にそしられじ、よき人にならんとて、道をまげ、古の意をまげて、さてあるわざはえせずなん。これすなはちわが師の心なれば、かへりては師をたふとむにもあるべくや。そはいかにもあれ。（玉勝間）

二四　白石と宣長

上田萬年

新井白石と本居宣長とは共に德川時代を飾るに足る偉人なり。この兩偉人の間に存する著しき類似と甚だしき差異とは、吾人の考究に値するものあるべし。

まづ漢意を排して國學を復興せん事は既に早く白石の唱へたる所ならずや。白石は漢文が我が國語の發達を妨げ

上田萬年
國語學者。文學博士。東京帝國大學文科大學教授。慶應三年（一八六七）生。

たるを論じ、大いに之を悲しみたり。白石は漢學者なり、しかも主客の別を辨へたる漢學者なりしなり。この點より見て、宣長は其の友谷川士清と共に大いに白石に負ふものありといはざるべからず。なほ其の事業の多面多種なること兩者の間に著しき類似をなせり。綿密なる財政家として、敏腕なる外交家として、歴史家として、詩人として、さては西洋學の鼻祖、卓見に富みたる語學家として、驚くべく多能多才なる白石は、皇學及び神道を中心として、神學者として、歴史家として、又一個の語學家として、而して又縱ひ秀拔なる地位を有し得ざるにもせよ、詩人として、文學批評家としての宣長と雙々相對して、我が學界に異彩を放てるにあらずや。しかも此の兩偉人を比較して殊に予輩の趣味を感ずるものは、蓋し他の一方に於て奇怪にも多くの反對若しくは差異の點を認め得るによるなり。今これらの點を述べんとするは單に興味ある事業たるのみならず、同時に又その眞面目を發揮するに必要なればなり。

白石と宣長との間に存する反對の點は、第一に、白石の峻嚴秋霜の如きに對し、宣長の溫潤春風の如きにあり。一方は廟堂に立ちて堂々の議をなし、君の忌諱に觸れて毫も顧みざるに、一方は廬を結び鈴を鳴らして從容自適す。性格の差異驚くべきにあらずや。第二に、白石が弟子を遺さゞりしに反し、宣長は全國に門弟を有し、享保年間に至りては其

の數四百九十人に及び、六十六國中弟子の無きは只二箇國なりきといふ。「第三に、白石は政治上の才幹あり、宣長は此の方面には殆ど無能なり。性格と時勢とは自ら此の如くならしめたるなり。第四に、兩者は同じく博學多識なれども、白石は事の實質に立入りて創始を喜び、啓發を事とせるに、宣長は考證を基とし、既成の事物を綜合組織するに長ぜり。讀史餘論を見よ、東雅を見よ、東音譜を見よ、前人に拔出づる白石の創始的才能は明かに見るを得べし。之に反して記傳を見よ、玉の緒を見よ、三音考を見よ、前代及び其の同時代の學問は偉大なる手腕の下に統一せられて後世發達の基礎の茲に置かれたるを知らん。第五に、白石は理を本

讀史餘論＝一連東雅＝語源ヲ後明シタル本ヲ。東音譜＝支那ノ本著ノ音譜。

記傳＝事記傳。玉ノ緒＝天爾乎波（テニヲハ）ニ關スル研究ヲ主トシタルモノ。三音考＝漢音、呉音、唐音ニツイテ述ベタルモノ。

とし、宣長は信仰を本とせるを見る。一方は科學者なり、一方は少くとも或度までは宗教家なり。彼は韓語・梵語・宋元の音、進んでは西南洋蕃語までが國語の中に侵入したるを說き、此は鼻音を排し、半濁を說き、溷濁なる外國音の清純なる國音を侵す能はざるを說く。第六に、白石は實地の日本に向ひ、宣長は理想の世界に進み入らんとす。讀史餘論・藩翰譜・折焚く柴の記を讀んで、記傳・玉勝間に及べば著しく逕庭あることを感ずべし。第七に、一は天下の視聽を集むる江戸の幕府に立ちて盛に世と戰ひ、一は平和なる伊勢の地に於て徐ろに其の學問を研究せり。第八に、其の生涯の徑路に大いなる差異あり。土屋侯の一足輕の子として人を

ベル。經册。（たんさく）

コムダク 混濁 ニゴリ

藩翰譜＝徳川時代諸侯ノ系圖ナリ。

徑庭 カケハナレタリ。

驚かしたる幼年時代と失意に滿ちたる中年時代とを送れる後、古河・甲府二侯に歴仕し、忽ちにして天下の政事に參與し、榮譽寵遇を極めたりしが、六十一歳時勢の變に遇ひ、一朝にして榮辱地を換へ、寂しく晩年を送りたる白石と幸福なる木綿問屋の息子として十分なる普通教育を受け、書を好むが故に醫を學ばしめられ、紀州侯の奥殿に奉仕して靜かに好學の心を養ひ、家には二男三女を擁し、遂に山室山に千年の春を樂しめる宣長との境遇の懸隔は又その性格に差異を生じたる一の原因なるべし。

白石と宣長とは、性格境遇の差異此の如く大なれども、等しくこれ日本の人傑にして、同一の大なる天才が兩個の極端に發達せる好例を遺せるものと謂ふべし。

二五　扇の的

さる程に、阿波・讃岐に平家を背いて源氏を待ちける兵ども、あそこの峯、こゝの洞より十四五騎、二十騎うち連れうち連れ馳せきたる程に、判官程なく三百騎になりたまひぬ。「今日は日暮れぬ、勝負を決すべからず。」とて源平互に引退くところに、沖より尋常に飾つたる小船一艘汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、船を横ざまになす。

あれは如何に。」と見るところに、船の中より年の齢十八九許なる女房の柳の五衣に紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出し

さる程に　安德天皇壽永四年二月十八日。

判官　檢非違使尉源義經。

たるを船のせがいに挾みたて、陸へ向つてぞ招きける。判官後藤兵衛實基を召して、「あれは如何に。」とのたまへば、「射よとにこそ候らめ。たゞし大將軍の、矢面に進んで御覽ぜられん所を、手だれに狙ひて射おとせとの謀とこそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候らん。」とまをしければ、判官「身方に射つべき仁は誰かある。」と問ひたまへば、「手だれども多く候なかに下野の國の住人那須太郎資高が子に與一宗高こそ小兵にては候へども、手はきいて候。」と申す。判官「證據があるか。」「さん候。かけ鳥などを爭ひて三つに二つは必ず射落し候。」と申しければ、判官「さらば與一呼べ。」とて召されけり。

せがい＝舷　板ニテ棚ノセグナラ　べうん所

手だれ　手垂ノ轉　其ノ殺ノ者デタンモノ

かけ　賭

かちん＝藍黑　はたそで＝袖ヲ云フ　足白＝紐ヲ通ス　金具ヲ飾ル　ヂコレラヘテ　太刀

はたそで　袖一幅半のうち、袖口の方半幅。

足白の太刀　緒をとほす金具を銀にてつくれる太刀。

ぬための鏑　鹿の角にて作れる鏑。

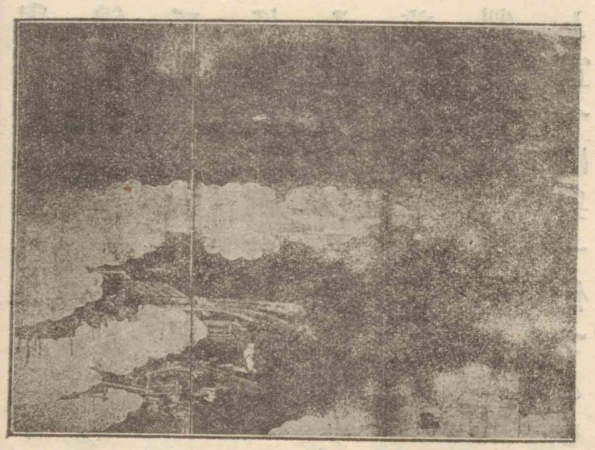
えりふ　鷹ノ尾ノ黒キ横、カヅケアンモノ。

滋藤　鹿角デコレラヲ、縛ヲスルヒ　藤ヲシケク巻キタル弓ナリ。

與一その比はまだ二十ばかりの男なり。かちんに赤地の錦を以ておくび・はたそでいろへたる直垂に萌黃縅の鎧着て、足白の太刀を佩き、二十四差いたる切斑の矢負ひ、薄切斑に鷹の羽割合せてはいだりけるぬための鏑をぞ差添へたる。滋藤の弓、脇に挾み、甲をば脫ぎて高紐にかけ、判官の御前に畏まる。

判官「いかに與一、あの扇の眞中射て敵に見物せさせよかし。」と宣へば、與一「仕つとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き身方の御弓矢の疵にて候べし。一定仕らんずる仁におほせつけらるべうもや候らん。」と申しければ、判官大いに怒つて、「今度鎌倉を立つて西國へ向はんずる者ども

は、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜん人々は、これより疾く〳〵鎌倉へ歸らるべし。」とぞ宣ひける。



那須與一扇の的を

まろほや　やどりぎの上に鳩二つ飛べる形。

與一、重ねて辭せば惡しかりなんとや思ひけん、「さ候はゞ外れんをば存じ候はず、御諚にて候へば仕つてこそ見候はめ。」とて御前を罷りたち、黑き馬の太く逞しきにまろほやすつたる金覆輪の鞍置いて乘つたりけるが、弓取りなほし、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。味方の兵ども與一が後を遙かに見送つて、「此の若者一定仕らんずると覺え候。」と申しければ、判官も賴しげにぞ見たまひける。矢比少し遠かりければ、海の中一段ばかり打入りたりけれども、猶扇のあはひは七段ばかりもあらんとこそ見えたりけれ。

鞍る國（粉野山樂蘂）末松子爵藏）

比は二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折節北風烈しう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟は搖り上げ、搖り

南無ニ帰命頂礼

権ニカリニ現ニアラハレル。

据ゑ、漂へば、扇もくしに定まらず、ひらめきたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれもはれならずといふことなし。

與一目を塞ぎて、「南無八幡大菩薩、別してはわが國の神明、日光權現・宇都宮・那須湯泉大明神、願はくはあの扇の眞中射させたまへ。これを射損ずるものならば、弓切折り、自害して人に再び面を向くべからず。今一度本國へ歸さんと思召さば、この矢はづさせたまふな。」と心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹弱りて、扇も射よげにこそなつたりけれ。

玉葉の前項平家物語記ニ
暫ちらめ花や紅葉ふを
見つるかな
吉野龍田の秋盛ふらねど

與一鏑を取つてつがひ、よつ引いてひようと放つ。小兵とはいふ條、十二束三つぶせ、弓は強し、鏑は浦響くほどに長鳴りして、過たず扇の要ぎは一寸ばかり置いてひいふつとぞ射切つたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一揉、二揉、揉まれて海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日の輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ搖られけるを、沖には平家舷を敲いて感じたり、陸には源氏籠をたゝいてとよめきけり。（平家物語）

二六 落花の雪

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて鎌

七月十一日 後醍醐天皇元徳二年。

落花の雪 またや見ん交野の御の櫻狩花の雪ちる春の曙。藤原俊成。

紅葉の錦 朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき。藤原公任。

倉まで下りたまひしかども、様々に陳じ申されし趣、實にもと赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに專ら隱謀の企彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に復六波羅へ召捕られて關東へ送られたまふ。再犯赦さゞるは法令の定むる所なれば、何と陳ずとも許されじ、路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひまうけてぞ出でられける。

落花の雪に蹈みまよふ交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸る嵐の山の秋の暮、一夜をあかすほどだにも旅寢となればものうきに、恩愛の契淺からぬわが故郷の妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住馴れし九重の帝都をば、今をかぎりと顧みて、思はぬ旅に出でたまふ心の中ぞあはれなる。

憂きをばとめぬ逢坂の關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱。沖をはるかに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く身をうき船の浮き沈み。駒もとゞろと蹈みならす勢多の長橋打渡り、行きかふ人にあふみぢや、世をうねの野に鳴く鶴も子を思ふかとあはれなり。時雨もいたくもり山の木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎゆけば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず。物を思へば夜の間にも、おいそのもりの下草に駒を留めて顧みる、故郷を雲や隔つらん。

紀貫之 逢坂の関の清水に影見えて今や引くらん望月の駒

交野＝河内國

こがれ＝漕ぎ＝焦

うき＝浮き＝憂

あふ＝逢＝近江

うね＝宇＝畝

もり＝守＝盛

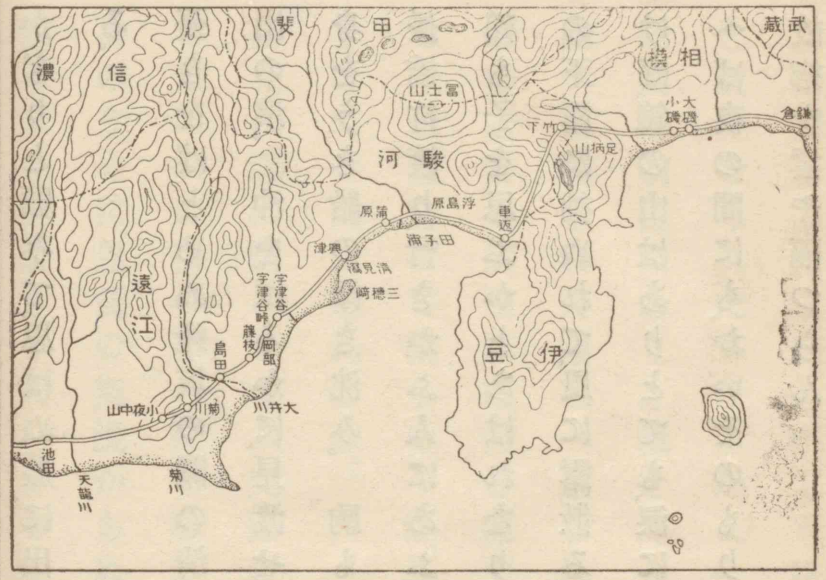
おいそ＝老＝齢

老ヲコトヅニカク

世をうねの野 近江より朝立ちくればうねの野にたづぞなくなる明けぬこの夜は。古今集。

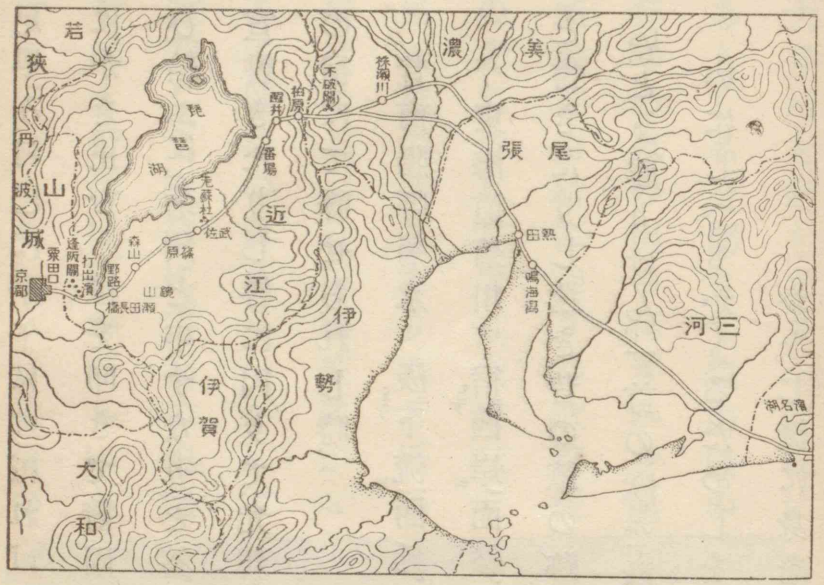
時雨もいたく 白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり。紀貫之。

なるみがた
小夜千鳥解こそ近くなるみがたかたむく月にしほやみつらん。
藤原季能。



番場・醒ケ井・柏原、不破の關屋は荒れ果てゝ、猶もるものは秋の雨、いつかわがみのをはりなる熱田の八劍伏しをがみ、汐干に今やなるみがた。かたぶく月に道見えて、明けぬ、暮れぬと行く道の末はいづこととほたふみ、濱名の橋の夕汐に引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれとゆふぐれの

命なりけり
年たけてきたる鹿ゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山。西行法師。



晩鐘鳴れば、今はとて池田の宿に着きたまふ。

旅館の燈幽かにして鷄鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて天龍川を打渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋み來てそことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり。」と詠じつゝ、二度越えし跡までも羨ましくぞ思はれける。隙行く駒の

足早み、日已に亭午にのぼれば、餉進らする程とて、輿を庭前にかき止む。轅を叩きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり」と答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎に因りて、光親卿關東へ召し下されしが此の宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水　汲下流而延齡、
今東海道菊川　宿西岸而終命。

と書きたりし遠き昔の筆の跡、今はわが身の上になり哀やいとゞ勝りけん、一首の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへも、かゝるためしをきく川の
おなじ流に身をやしづめん。

亭午に達する間に餉を乾飯

光親卿　中納言藤原宗行の誤。

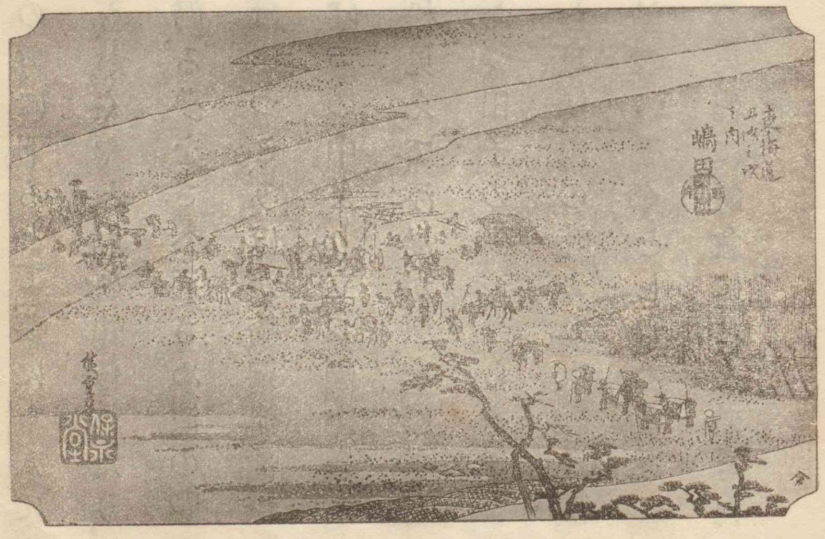
昔南陽縣　南陽酈縣、有二甘谷一。谷中水甘美。上有二大菊一。落レ水從レ山流下。得二其滋液一、谷中人家、飲二此水一。上壽百二三十、其中百歳、七八十者則爲レ夭。風俗通。

きく川の聞に菊

大井川を過ぎたまへば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鷁首の船に乘り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひ續け給ふ。島田・藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛うらがれて物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、蔦かづらいと茂りて道もなし。昔業平の

都ノ火堀川ニ男ヒ出ス

都歌鶴翁ノ歌



島田（廣重筆　東海道五十三次の内）

中將の住む處を求むとて、東の方に下るとて、「夢にも人に逢はぬなりけり」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。

清見潟を過ぎたまへば、都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守にいとゞ涙を催され、むかふはいづこ、みほが崎、興津・蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なきおもひに比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、汐干や淺き、船浮きておりたつ田子のみづからも浮世を遠る車返。竹の下道行き惱む足柄山の峠より大磯・小磯見おろして袖にも波はこゆるぎのいそぐとしもはなけれども、日數積れば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着きたまひけれ。（太平記）

夢にも人に　駿河なるうつの山べのうつつにも夢にも人にあはぬなりけり。

清見潟浦風寒き波の音に夢ゆめるさぬ波の關守

上なきおもひ　富士のねの煙はなほぞ立ちのぼる上なきものはおもひなりけり。藤原家隆。

島田三郎。評論家。嘉永五年（一八五二）生。

二七　福澤先生を悼むその一

島田三郎

三田の高臺に長嘯して、天下の瞻望を維ぎ、一管の筆を揮ひて泰西の文物を輸入し、三寸の舌を鼓して平民の氣焰を揚げたる當代の巨人福澤先生逝けり。痛悼に勝ふべけんや。先生は一代の師表にして、明治の社會、先生に負ふ所極めて大なり。曩に先生中風の症に惱み、一時世人を痛憂せしめたれども、其の後輕快に赴き、漸く健康に復するを傳ふ。聞く者皆愁眉を開きて之を祝せざるはなし。吾人以爲く、「先生齡六旬を超えて一旦大患に罹る、其の快談健筆以て社會を鞭撻・啓發せる故態に復せんこと難かるべし」と。然れど

も此の大平民の社會に存するは後進の恃んで心を強くする所なり。即ち其の優游自適一日を永くし、以て吾人の志に酬いんを願ふこと甚だ切なりき。然るに天慭に此の老を遺さず、遂に本月三日午後十時を以て白玉樓に徵し去る。嗚呼先生の音容また接すべからず。豈哀惜嘆嗟に勝へんや。

先生の出處經歷、其の主義、其の功績は普く世人の知る所なり。其の社會に對する關係より家庭の生活に至るまで、其の著書と自傳とに昭晰詳悉す。吾人今これを繰返す必要なし。然れども此の際に當り、吾人の所感を略述するは亦敬慕追念の志を表する所以なり。

天慭に。天不慭遺二老。左傳。

本月。明治三十四年二月。

先生は教育家なり、時代思想の鼓吹者なり。幕府の飜譯方となり、三回歐米に航せし外、何の經歷あらず。其の後半の生涯は三田の高臺に逸居して三十餘年を經過す。波瀾なく變化なし。然れども其の言論文章を以て一世を鼓動し、社會を陶冶したる所の偉大なる勢力は、ひとり當世に匹なきのみならず、古今を通じて有數なる者と評せざるべからず。蓋し嘉永・安政以後、日本が海外の潮流の中に漂ひ、新舊の思想相鬪ふに際し、先生は新思想誘引の先達となり、舊世界の殘壘を

福澤諭吉

破りて一大勝利を博し、確かに先登の月桂冠を戴ける者なり。

先生の學專攻なし。故に一科の長所なく、又獨創の發明あらず。然れども思想博大、常識明敏、進歩の見解を一切の事物に應用して之を社會に弘布する能力に至りては、萬人に超絶せり。且其の識見は常に社會に先んぜり。先生幼時儒教の薫陶を受け、其の長崎に赴くや、砲術を修めんと欲し、端なく蘭書を誦習せり。此の際既に砲術の以て志を成すに足らざるを覺れり。其の江戸に來り横濱に遊びて、英語の招牌を讀む能はざるや、忽ち蘭學を棄てゝ英語を學べり。其の海外に遊んで歸るや、幕府の衰滅免るべからざるを看取し、再び米國に入るや、兵器を購ふかはりに書籍を買うて歸り、戊辰戰亂の間冷然書を講じて顧みず。王政復古、士皆進仕を榮とするに際し、巷間に俯して後進を誘掖し、戰餘の殺氣未だ收らざるに、雙刀を脱して市民と稱せり。漢儒が門人を食客と同視する時代に授業料を收むる學校組織を立て、政事喧擾の間に社會的薫陶に力を致せり。これ皆時流に先だてる見にして、當世にぬきんづる眼を有するにあらざれば能はざるなり。

先生は百代を洞看し、宇宙を解釋する哲學者にあらず、天人冥合、靈魂救濟を志とする宗教家にあらず、詞を修め句を錬る文士にあらず、否却て文字のために思想を犧牲にする陋

習を打破せんとせる人なり。これを要するに一代の著述、文章は、崇高宏大、深邃幽玄なる思想界に觸るゝに非ずして毎時眼前の程度より一等を高めんとするにあり。而して見解分明、信仰確實、平易大膽なる文を以て之を宣傳す。其の多數を動かして偉大なる效果を收め、優に社會改造の目的を達せしはこれがためなり。先生の筆述、前後五十部百五冊收めて其の全集にあり。此の他、時事新報に載する者を合せば更に多からん。佛人テイヌ、曾て英國文界の偉人ジョンソンの全集を研究して謂つて曰く、「其の十九世紀に於て新に學ぶべき奇思妙想を發見せずと雖も、其の十八世紀の必要に應じて社會を裨益せし者多し」と。ジョンソンの勢力が當時に盛なりし所以、其の著述が一世に功ありし所以、こゝに在り。後の讀者其の奇思妙想を發見せざるを以て其の功を小とするを得ず。先生の文界に於ける位置、蓋しこれに近し。

テイヌ 佛國の歴史家。(1828—1893)
ジョンソン 英國の文學者。(1709—1784)

二八 福澤先生を悼むその二

島田三郎

先生の勢力を以て單に其の文章・識力に歸するは、能く先生を知る者にあらず。先生は確信・實行を大膽明快に筆に載す。これ世を動かす所以にあらずや。其の獨立自尊を說くや、口舌・文章に於てするのみならず、これを其の躬行に於てし、其の歐米の文明を鼓吹するやこれを事物に應用し、其

軒冕＝大官、乘ル車ヤ冠

の自由平等を宣傳するや、階級隷屬の生活を破るに汲々とし、其の官尊民卑の弊を論ずるや、自身軒冕を泥塗にする概あり、其の家庭の尊貴を說示するや、先生まづ其の實例を置かんと努めたり。是豈確信なき者の得て企つる所ならんや。

先生を以て拜金宗の大和尙となし、節義を輕んずる者と爲すは、尤も先生と其の時代とを曉らざる者なり。蓋し先生が歐米の文物を輸入せんとするや、其の反面に於て鎖國の舊夢を一掃するに努めざるべからず。自主獨立の主義を宣べんとせば、其の反面に於て隷屬服從の慣習を打たざるべからず。平民自活の生業を敎へんとせば、武士世祿の依

思潮

釋迦を罵る　釋迦といふいたづらものが世に出でて多くの人をまよはすかな。　一休。

ヴォルテール　佛國の文學者。(1694—1778)

賴心を棄てしめざるべからず。此の過渡の時機に會し、武士の理想的人物を罵倒して以て一世を警醒せし者即ち有名なる楠公論にあらずや。是、楠公其の人を擊つにあらずして武士の舊思想を擊ちたる者、恰も一休の俗僧を破せんが爲に釋迦を罵りたる意に髣髴たり。其の金錢を貴ぶ說法は「武士は食はねど高楊枝」の氣習を破したる者に過ぎず。先生これがためには世の怒潮を冒して戰へり。吾人却て先生の勇悍を稱せざる能はず。

先生の明治社會に於ける位置は頗るヴォルテールが十八世紀の佛國に於けるものに似たり。先生が歐米の文物思想を總概して輸入せんとし、博大通達の材を以て盛に飜譯・

著述に從事せし所、恰もヴォルテールが英國に博採せしに似たり。甲が儒教を說破せし所、恰も乙が羅馬加特力を破壞せんとせし者に類す。而して其の辯鋭利、共に能く破壞の目的を達したれども、其の言奇矯、後進をして誤解せしめ、一は遂に拜金宗といふ一派の信仰を形成し、他は遂に宗教其の者を擊破せしが如き看を呈するに至れり。三田の末流に拜金の臭味あるは、荀卿の說によりて李斯の徒を出したるに類す。吾人は先生を以て此の宗派の大和尚と認むる能はざるなり。

先生は儒教を痛擊し、自活生業を稱道せしが、先生の行は却て儒教の旨に協へり。是、一見奇なるが如くなれども決し

奇矯　アマリニハゲシクキヲテラフコト

荀卿　周の大儒。性惡說を唱ふ。

李斯　楚の人、荀卿に學ぶ。秦の始皇及び二世皇帝に仕ふ。

形而上ノ考察　物理ヲ究ムルニテノ考察

哲理　無形ノ哲理ナル上ノ理論

處士ハ故ニ知カズ死ヲ問ニ決ス　嚴子陵ト光武トノ故事ヨリ來ル

生を知らず　季路問レ事ニ鬼神。子曰未レ能レ事レ人、焉能レ事レ鬼。敢問レ死。曰未レ知レ生。焉能知レ死。

性と天道　子貢曰夫子之文章可二得而聞一也。夫子之言二性與二天道一不レ可二得而聞一也。

福澤諭吉筆蹟

て奇ならざるなり。先生は形而上の考案に多くの思を凝らさず、專ら實踐躬行を貴べり。是「生を知らずして焉ぞ死を知らん」との旨に合するにあらずや。先生の歐米の文物を輸入する、專ら制度・商業・工藝・科學の實物的傾向を有し、哲理・宗教の研究工夫を要せず。是、性と天道とを語らざる者に類するにあらずや。其の一方に武士的生活を打擊するに拘らず、去就を嚴明にして處士自

ら高うせる迹は、儒教の進退節義を言ふ者に類す。其の自尊といふ教訓を以て天爵を全くせんとするは、孟軻の「人々己に貴きものあり」といふに合し、其の軒冕を泥塗にして王公に屈下せざる所は、大人を藐視し、晉楚の富と爵とに對するに德と齒とを以てしたるに似たり。先生は知識を歐米に博採せしが、其の行實は幼時の儒學に涵養せらるゝことの深く、唯俗儒の範圍を脫したる者の如し。これを聞く、「先生の嚴父百助君儒學を修め、伊藤東涯の人と爲りを慕へり」と。堀川の實踐學派、先生の心を養ひしものか。而して先生少時尤も春秋左氏傳を愛讀せりといへば、節義に嚴なるところ、由來なしと言ふべからず。

天爵　有二天爵者一、有二人爵者一。仁義忠信樂レ善不レ倦、此天爵也。公卿大夫、此人爵也。

人々己に　欲レ貴者人之同心也、人々有下貴二於己一者上。弗レ思耳。

晉楚の富　晉楚之富不レ可レ及也。彼以二人爵一、我以二吾仁一。彼以二其富一、我以二吾義一。

先生晩年著す所頗る壯年の思想に異なり。福翁百話中往往形而上の問題に涉るものあり。然れども科學的研究の結果にあらず。先生は結局常識の人なり、實踐の人なり。博大なる思想家にして精深なる考究家にあらず、大膽なる論辯家にして懷疑の批評家にあらず。唯其の四十年間一貫の行徑を辿りて世の風濤に蕩搖せられず、誠實に社會を薰陶し、諄々として倦まず、言行一致、平易の言を立てゝ萬人の行ひ得る道を宣べ、自ら善くし、兼ねて人を善くせる、其の大功誰か先生に比すべき者あらん。眞に常識の巨人、平民の典型なり。獨立自尊の四字は先生の躬行によつて社會に現示せられたり。先生の書は以て先生を評するに足ら

ずして、唯其の行實を研究して始めて能く其の教育を解得すべし。今や此の巨人を失へり。明治社會の損失これより大いなるはなし。吾人、公に於ては平民の典型を奪はれたるを惜み、私に於ては敬慕せる巨人を失へるを悲しむ。

（福澤先生哀悼錄）

師範學校 國文教科書 本科用 卷四 終

師範學校 國文教科書 本科用 卷四附錄

第四篇 表記法

一 送假名法

漢字を以て國語を寫すに當り、助動詞・助詞等の如き相當の漢字なき語は當然假名を用ひざるべからず。又動詞・形容詞の如く相當の漢字はあれど、その活用形を示す道なきものは漢字の下に假名を添へざるべからず。通例假名交り文に於ては名詞・代名詞の如き體言は漢字を用ひ、動詞・形容詞の如き用言は漢字に送假名を添ふるものとす。されど送假名には未だ一定せる標準なし。今國定小學讀本に用

送假名法の四綱領

ひたる送假名法の大要を示さん。

一　活用語の語尾變化を書きあらはすこと。

二　語の末に附屬する助詞・助動詞をかきあらはすこと。

三　語の末に含まるゝ接尾語を書きあらはすこと。

四　漢字を音讀せるものは漢字以外の音を書きあらはすこと。

今左に例を擧げて之を略説せん。

一　活用語は語尾を送る。

1　普通の語尾

書ク　落チテ　死ナズ　出デン（動詞）

高ク　清シ　同ジキ年　嬉シケレ（形容詞）

可シ　如ク（助動詞）

2　音便

説イラ　乞ウテ　積ンデ　悲シイカナ

3　所謂延言

願ハク　恐ラク

〔除外〕　曰はハを送らず。

子曰く、巧言令色鮮し仁。

二　活用語の語幹にもとの活用語の語尾を含むものは之をも送る。

動カス　轉バス　語ラフ　塞ガル

悲シム　苦シム　全クス　辱ウス　嬉シガル

騒ガシ　喜バシ　歎カハシ

〔除外〕　本則に相當する活用語にてもその本形三音以内のものは語尾のみを送る。

分ツ　盡ス　惜ム　戀シ

三　副詞より轉じたる活用語は尚副詞の送假名をも附す。

復ビス　未ダシ　甚ダシ

四　活用言の熟語はそれ〴〵送假名を附す。

思ヒ出ス　霞ミ渡ル　數ヘ盡シ難シ

〔除外〕熟語の上の動詞二音なる時は讀みまがふ虞なきかぎりその語尾の送假名を省く。

召使フ　請取ル　引合ス　折レ込ム　立チ通ス　明キ過グ

五　活用語より轉じて副詞・接續詞に用ふるものはその活用を書きあらはして送假名とす。

極メテ　總ジテ　及ビ　代ル代ル

〔除外〕副詞・接續詞にのみ用ふる漢字の場合は尙六の例による。

豫テ　於テ　雖モ　況ヤ

六　二音の副詞モシ・ヨシ・ヨク・カクの四語及び三音以上の副詞・接續詞に用ひたる漢字には最後の一音を送假名として添ふ。

若シ　縱シ　能ク　斯ク　併シ　殆ド　必ズ　尤モ　聊カ　甚ダ

〔除外一〕各愈屢交偶抑の如く二音以上の語の重音にて一字の漢字を當つるものは、誤讀を生ずる虞ある時にかぎり語の右側下に〻を附し、送假名をせず。

各〻　人ノタメニ盡ス

〔除外二〕日外・加之・就中・假令・生憎の如く漢字の熟語を訓讀したるものには送假名を附せず。

七　名詞・代名詞等には送假名を附せざるを通則とすれども、動詞より轉じて名詞となれるもの〻中、左のものには本の動詞の活用を書きあらはして送假名とす。

1 漢字音を活用したる動詞の名詞となれるもの。

封ジ。 通ジ。 察シ。 損ジ。

2 分詞の性質を有して名詞と動詞との間なるもの。

本ヲ買ヒニ行ク

3 兩樣に讀まるゝ語にして區別する必要あるとき。

渡リシ 預ケリ人 一切レリ

4 漢字を音讀せる同形の語ありて區別する必要あるとき。

樂ミ(樂) 讀ミ書キ(讀書)

八 名詞・代名詞・數詞等の接尾語は送る。

重ミ 寒サ 何レ 己レ

憎ゲ 一ツ 萬ヅ 半バ

〔除外〕 二音の代名詞は接尾語を送らず。

我 誰 其 此 彼

九 單語に當てたる漢字僅に其の一部分に該當せりと見ゆる場合には、その他は送假名として書きあらはす。

指サス 鞭ウツ 春メク 黃バム

赤ラム 薄ラグ 安ラケシ 安ラカニ

定マル 連ナル 靜ケシ 横タハル

二 句讀法

文と文との關係、文中の語・句・節の相互の關係を明かにせんがために種々の符號を用ふ。之を句讀といふ。

句讀は國語の表記法としては未だ廣く通用せずと雖も、必要上漸次之を用ふるに至るものゝ如し。

句讀法は未だ一定せず。又性質上一定し難きこともあり。今大體國定小學讀本に用ひたる句讀法の大要を示さん。

句點

マル。マルは文のきれめにつく。

花咲く。

進め、ますらを。

讀點

テン、テンはその用法甚だ廣し。その重なるものは、

1 文の切れたる如くにて意味の續き居るとき、

進め、ますらを。

これは莖なり、根にあらず。

人の短をいふことなかれ、己が長を說くことなかれ。

2 文意の兩義にとれ易きとき、

母、子を抱く。

賴朝、範賴・義經をして平氏を討たしむ。

太郎は甚だ、活潑なる運動を好む。

3 並列したる句節の間に、

父母は我を生み、我を養ひ、我を敎へ給へり。

規律の整へる、時間の正しき、感ずるに堪へたり

4 特に提起したる語句の下に、

高山彥九郎・蒲生君平・林子平、此の三人を世に寬政の三奇士といふ。

5 句節の長くなりて甚だしく誦讀に不便なるとき

午前六時までに乘車する者に限り、割引す。

磊落と粗放とは似て非なるものなれば、とりちがふべからず。

特派員として佛蘭西の戰線に出張せしめたる社員某の發したる第一回の通信は、昨日始めて本社に達したり。

並列點

クロマル・ 並列せる名詞の間につく。

孔子・釋迦・耶蘇・ソクラテス、之を世界の四聖といふ。

勾畫

カギ「」すべて地の文に對して挿入の文を區別するに用ふ。

1 對話又は引用の文

時の人「死せる孔明、生ける仲達を走らす。」といへり。

古書に「日本は神國なり。」とあり。

2 獨思の文

「今年こそはしつかりやらう。」と決心した。

複勾畫

フタヘカギ『』挿入文の中にあらはるゝ挿入文を區別するに用ふ。

父は文吉に「もし遊びに行つて選擧をしなかつたら、人は『文吉のおとうさんは村のためを思はない人だ。』とわるくいふだらう。」といひました。

句讀法の大要は右の如くなれど、讀者の誤解を招き不便を感ぜざる限は、更にこの符號を省略するも妨なし。

分別書方

三 分別書方

語句のきれめを明かにせんがため或字と字との間を離して書きあらはす書方を分別書方といふ。羅馬字にては尤も必要なれど、漢字交り文にてはそれほど必要にはあらず。假名文にては分別書にするを便とすれど、未だ一般には行はれず。

國定小學讀本の分別書方は單語は各別に離して書くを原則とし、只左の如き單語は分別せざるものとす。

一 助動詞(指定の助動詞を除く)

タイソウ ウツクシカツタ。

ナカナカ スグニ ハ ユキマセン。

ヨイ テンキ デス。(除外例)

アレ ハ ヤマ ダ。(除外例)

二 助動詞テ・タリが活用言の下に來るとき

ニイサン ハ イマ ヘイタイ ニ イツテ キマス。

ワタクシ ハ ソト ガ カタクテ 中 ガ ヤハラカ デス。

イモウト ノ モリ ヲ シタリ オツカヒ ニ イツタリ シマス。

三 助詞バ・シ

ミレバ ワカル。

サムケレバ イソゲ。

ジモ カクシ エモ カク

尚左に分別書の例をあげん。

オキク ト オハナ ガ オキャクアソビ ヲ シテ キマス。オハナ ガ オキャクデス。「ゴメン クダサイ。」「ヨク イラッシャイマシタ。ドウゾ オアガリ クダサイ。」

オキク ハ オハナ ヲ ザシキ ヘ ヽホシテ、オチャ ヲ ダシマシタ。

師範學校 國文教科書 本科用卷四附錄終

文部省檢定濟

大正八年一月十日 師範學校國語科教科書

明治三十六年十二月五日印刷
明治三十六年十二月八日發行
明治三十七年二月廿九日訂正再版發行
明治四十二年三月三日訂正十二版發行
大正五年一月七日修正十六版印刷
大正五年一月十日修正十六版發行
大正七年十月廿七日修正十五版印刷
大正七年十月三十日修正十五版發行
明治四十四年十一月十六日訂正十三版發行
明治四十五年二月九日訂正十四版發行
大正八年一月二日修正十八版印刷
大正八年一月五日修正十八版發行

定價金三拾九錢
大正十年度臨時定價金八拾六錢

編作者 東京市小石川區高田老松町五十二番地 吉田彌平

發行者 東京市神田區裏神保町六番地 上原才一郎

發行所 東京市神田區裏神保町六番地 光風館書店 (電話麹町神田三千八十七番) (振替口座東京三二一七番)

印刷者 東京市神田區裏神保町六番地 四海民藏

東京秀英舍第一工場印刷

所有 著作權

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附可致候